コンテンツのご紹介

　前回の定期便ではお忙しい中、アンケートにご協力いただきありがとうございました。
　回答いただいた内容をもとに、よく利用されているコンテンツをご紹介します！

HP「建設現場へGO!」

建設業に関するイベントやコンテンツを検索・閲覧される際にご利用いただけます！

https://genba-go.jp/

建設産業ガイドブック

出前授業や現場見学会、企業でのインターンシップなどで幅広く利用されています！

https://genba-go.jp/download/

コンテンツの詳細については
裏面をご覧ください！

HP「建設現場へGO!」

　建設産業の人材確保・育成に資する様々な情報が掲載されているポータルサイトです。
　資格試験の情報や建設業で働く人へのインタビュー動画、キャリアパスが掲載されたWEBサイト、仕事の魅力・やりがいを伝えるマンガなど、親しみやすいコンテンツも多数掲載されています。

建設産業ガイドブック

　建設産業の役割や各工事業の仕事について紹介したガイドブックです。
　写真やイラストで分かりやすくまとめています。
　仕事内容の紹介だけでなく、求められる力や女性の活躍についても触れられています。

将来を考える学生さんの
進路選択の一助となれば幸いです。

令和4年度 作文コンクール

入賞作品集

建設産業で働く方の作品

未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール

高校生の作品

高校生の作文コンクール

建設産業人材確保・育成推進協議会

令和４年度 建設産業人材確保・育成推進協議会

作文コンクール入賞作品集

選 定 結 果

建設産業で働く方の作品 …… P3

(未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール)

国土交通大臣賞

丹羽恵美子　コダマインフラサービス(株)　東京都　「ヒーローを探して」…… P4

不動産・建設経済局長賞

金澤優花　佐藤工業(株)　福島県　「「私自身は〝施工途中〟」」…… P5
南雲文音　(株)巴山組　新潟県　「女性施工管理者として働く」…… P6

優 秀 賞

佐藤夏輝　(株)橋本店　宮城県　「わたしと建設業」…… P7
猪俣夏来　(株)巴山組　新潟県　「現場にある『生(せい)』」…… P8
中林八恵子　加賀建設(株)　石川県　「チームで実感！わたしの成長」…… P9
石橋美希　但南建設(株)　兵庫県　「建築は幸せの中にある」…… P10

高校生の作品 …… P11

(高校生の作文コンクール)

国土交通大臣賞

安間菜月　静岡県立浜松工業高等学校 建築科１年　「幸せを創る職業」…… P12

不動産・建設経済局長賞

渡辺優斗　福島県立二本松工業高等学校 都市システム科３年　「二人の祖父の影響」…… P13
廣瀬一貴　山梨県立甲府工業高等学校 土木科３年　「未来を作る仕事」…… P14
秋山莉里花　長崎県立長崎工業高等学校 建築科３年　「建築界の未来」…… P15
古財凜香　熊本県立玉名工業高等学校 土木科３年　「青春の橋」…… P16

優 秀 賞

木村美友　宮城県古川工業高等学校 建築科３年　「繋がれる建築」…… P17
雨宮蒼空　栃木県立栃木農業高等学校 環境デザイン科２年　「建設業から社会を変える」…… P18
島田峻介　栃木県立栃木農業高等学校 環境デザイン科２年　「憧れの職業と未来への継承」…… P19
吉田光翼　千葉県立京葉工業高等学校 建設科(土木コース)3年　「我々の生活と建設産業の関係」…… P20
上岡優牙　東京都立葛西工業高等学校 建築科２年　「未来の建設産業」…… P21
望田奈歩　山梨県立甲府工業高等学校 土木科２年　「未来のために」…… P22
野澤春輝　山梨県立甲府工業高等学校 建築科３年　「自然と人と建築」…… P23
花村あずき　静岡県立浜松工業高等学校 建築科３年　「私を構成する」…… P24
横山芽依　岡山県立岡山工業高等学校 建築科１年　「私たちが受け継ぐ」…… P25
美濃優花　愛媛県立東予高等学校 建設工学科２年　「働きやすい環境へ」…… P26
永井詩音　愛媛県立東予高等学校 建設工学科３年　「将来の夢と工業との出会い」…… P27
岩崎愛華　熊本県立球磨工業高等学校 建築科２年　「人と地球が共に進む建設産業」…… P28
佐潟八重　鹿児島県立鶴翔高等学校 総合学科 環境緑地系列２年　「命を守る仕事」…… P29
宮原史凪　鹿児島県立鶴翔高等学校 総合学科 環境緑地系列２年　「夢はオペレーター」…… P30

受賞作品の講評

運営委員長　古阪秀三

この作文コンクールは建設産業で働く皆さんからの「私たちの主張」と高校生の皆さんからの「高校生の作文コンクール」の2つの部門で成り立っています。

「私たちの主張」は、建設産業で働く方々の思いであり、今年で15回目となります。今年のテーマは「次世代に伝えたい建設産業の魅力と誇り」、「建設産業を通じて感じた自身の成長」で、全国から348作品の応募がありました。最少年齢は18歳、最高年齢は66歳でした。また、女性の応募が今年は15.5%でした。さらに、30歳未満の若者の応募が約70%、一方では、仕事の第一線を退かれる頃になる熟練の先輩の方々が若者に伝えておきたいという意欲を持って、「私たちの主張」をしてくださいました。応募して下さった348人の方々に心から敬意と謝意を表します。

今年、国土交通大臣賞に輝いた方は丹羽恵美子さんです。

丹羽恵美子さんは『ヒーローを探して』と題して、毎日現場で頑張る人たちをヒーローといい、その魅力を伝え、新たなヒーローを探すために採用活動に励んでいる。丹羽さん自身は入社してから相当な期間は「事務職」として縁の下の力持ちに徹していたが、業務の幅を広げるために近年取り組み始めたのが「採用職」だったという。その出発点では、世にいう「建設業＝3K」が自分自身にもあった。そのイメージをいかに変えるか。そこで、会社の古株社員等に活躍の現状を聞くと日進月歩の技術と仕事の深さ、あるいは仕事への熱意と誇りが上がった。これらを就職活動中の若者に説明すると入社希望が増えてきたという。丹羽さんは今日も採用活動に励む。新たなヒーローを探して。見事な活動である。

不動産・建設経済局長賞には次の2人が選ばれました。

金澤優花さんは、『私自身は〝施工途中〟』と題して、入社早々に配属された建設現場で女性技術者として活動している姿を素直に書いている。配属された現場はJVで、JVの相手側の企業や下請け企業の現場配属には女性技術者／技能者がいて、機材を運んだり、意見を交わしたりする。私自身はややもするとしょい込む責任感、「それらを自身でしょいこむことがないように」というアドバイスをしてくれる先輩や型枠大工の職長のやさしさ。これらに関して、私自身の“竣工”を迎えないために、“施工途中”でありたいとする。静かであるが、意欲的な作文である。

南雲文音さんは、『女性施工管理者として働く』。文系の学科を卒業した南雲さんが女性施工管理者としてわずか1年余りの経験の中で「建設業は女性も活躍できるのだ」と伝えたいという。そのいくつかは、①未経験で何もわからない自分に優しく教えてくれる現場の作業員さん、②初めて使う安全帯や女性用トイレなど充実した環境での仕事、③女性目線で安全管理や看板制作を担当する日々、④入社即竣工動画の作成にチャレンジ、⑤施工状況が把握できるようにとの日々の写真管理、⑥これらの経験を通しての女性活躍の場所の確保、⑦出産後も復帰など。女性施工管理者のロールモデルとなりたい。南雲さんの活躍が楽しみである。

一方、「高校生の作文コンクール」は、全国の高校の建築学科、土木学科等で勉強をする若者が建設産業に抱くイメージや夢を発表するもので、今年が10回目です。今年のテーマは「私たちの暮らしと建設産業」、「私が描く建設産業の未来」で、全国から857作品の応募がありました。また、こちらの方でも女子の応募の割合が増え、約24%となりました。応募してくださった857人の若者の勇気をたたえ、また敬意と謝意を表します。

今年、国土交通大臣賞に輝いた方は安間菜月さんです。

安間菜月さんの作文は『幸せを創る職業』。「家の近くに工業高校があった」で始まる安間さんの作文は、進路を気にするようになった頃、父や兄の母校であり、自宅の近くにあるということ、さらには兄からの話や実際の高校の雰囲気を感じてから、その工業高校に入学したいと思うようになったという。その当時からインテリアに興味があり、内装に携わる仕事がしたい、さらには「誰かに楽しいを沢山届けるための遊び満載の空間」との一つの記事。これらから「誰かの為にその人が一生を楽しく暮らせるような空間を作りたい」という一人の高校生の素直な思い、さらには「小さな一つの幸せを沢山創りたい」。素直な高校生が将来活躍するであろう職業への思いを書いた見事な作文である。このような将来への思いを持つ若者の成長が大いに期待される。

不動産・建設経済局長賞には次の4人が選ばれました。

渡辺優斗さんは、『二人の祖父の影響』。はじめに「私の両祖父は土木や建築関係の仕事をしている」という。一人は大工、もう一人はクレーンのオペレータ。いずれも現場では力いっぱいの仕事、家に帰ればテレビを見るなど気ままな様子である。そんな両祖父に憧れ、自分自身も工業高校入学を決めたとし、さらに、両祖父が見せる「この仕事が好きだ」という一つひとつの行動が影響し、熱意と熱量を持った土木技術者になろうと考えている。このような高校生が、二人の祖父の影響を存分に譲り受け、正しいものを誠実につくるという覚悟をもって育ってくれることを見守っていきたい。

廣瀬一貴さんは、『未来を作る仕事』。第一声で「高校卒業後、施工管理技士として建設業に携わりたい」。先輩の話では不安や焦りなどはあるが、それよりも現場で仕事がしたいという好奇心が強い。それもトンネル、橋やダムの仕事が魅力的。その一例は「信玄堤」。例年大水に見舞われていた地域で堤防を築いた治水施設。このことに感銘を受け、「建設業とはまさに未来を作る職業だ」とのこと。純粋で素朴に力強く書いている。作文というよりも、積極的な意見をストレートに訴える力が感じられ、他の作品にはない魅力がある。彼の成長を見守ってみたい。

秋山莉里花さんは、『建築界の未来』。「建築産業に未来はありますか？」というきわめてわかり易い疑問、しかし、むずかしい回答から始まった作文。その疑問は熊本大地震に始まり、現在も続くコロナ禍への対応策について。秋山さん自身は、これらを排除するのは自分たち次第、「私たちが私たちの手で未来を創っていきます。」と説く。この心強い発信を社会がどのように受け入れるのか、具体的には、産官学がどのように協力関係を築いていくか、国際間での連携をいかにするかの問題であり、宿題であると考える。

古財凜香さんは、『青春の橋』と題して、自分が通学時に利用する橋、ゴミや雑草があり、コンクリートが欠けている橋、自分が住む町も老朽化が進み、危険な橋があるかもしれない。このような問題意識の中から、市役所と学校が共同して橋の点検・清掃活動を行う計画を立て、活動を始める予定とのこと。そして、自身は「思い出のある橋を作る」という。そのために「高校を卒業したら土木職の公務員として働きたい」、そして、「将来、この夏に行った橋の点検作業の経験を生かして、多くの人の記憶に残るような街づくりをしたい」とのこと。この先の活躍する古財さんを見てみたい。

「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」の応募作品を読みながら、いつも感じることですが、2つの部門とも、実際に経験したこと、観察したこと、家族・同僚・友達と話したこと、さらに将来への期待などが丁寧にかつわかり易く書かれています。それが契機となって建設産業で働くことになったという事例が多いことも納得です。すべてを公開して読んでいただくのがいいのではないかとの印象を持っています。

その一方で、日本の建設産業の近未来の市場は相当な変革が求められます。伝統的なこと、技術的な継続性を大事にすることはいうまでもないことですが、その一方で、思い切った改善、革新等の活動も重要です。このような状況の下、素直に自分が感じたこと・考えたことが書けること、悩ましいこと・問題だと思うことを文字で伝えられること、これらのことがいかに大切かを「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」を読みながら確信しました。これからも大いに文章を書きましょう。そして他者に伝えましょう。それらが建設産業の改善、働きがいのある産業へとつながることを期待したいと思います。

写真撮影：衣笠 名津美

建設産業人材確保・育成推進協議会

令和４年度
未来を創造する建設産業
「私たちの主張」作文コンクール

■趣　旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、建設産業で働く方々の熱い想いを伝えていただくとともに、一般の方々に建設産業についての理解を深め、関心を高めていただくために作文コンクール「私たちの主張」を実施しています。

今コンクールは、平成20年度から実施し、今年度で15回目となりました。

■募集概要

応募資格	建設業の仕事に従事している方
応募期間	令和4年5月9日(月)～6月30日(木)
応募テーマ	建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。 次世代に伝えたい建設産業の魅力と誇り　又は　建設産業を通じて感じた自身の成長
応募総数	348作品

■作文コンクール入賞作品

入賞作品は、(一財)建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。

[作文コンクールWEBサイト]

https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/result.html

■選考委員

古阪秀三	立命館大学 OIC総合研究機構 グローバルMOT研究センター 客員研究員 建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
西山茂樹	国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課長
沖本俊太朗	国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課 建設キャリアアップシステム推進室長
上田国士	(一社)全国建設業協会 常任参与
樋脇　毅	(公社)全国鉄筋工事業協会 理事
奥地正敏	(一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事

2022 ESSAY CONTEST

国土交通大臣賞

ヒーローを探して

丹羽（にわ） 恵美子（えみこ）［コダマインフラサービス株式会社］

「建設業の採用が厳しいのは、今に始まったことではないんですよ。」そう言いながら資料を見せられた私は、低い数字が並ぶ表を見て愕然とした。ここはハローワークの23番窓口、人材確保・就職支援コーナー。特に採用が難しいとされる建設・警備・運輸業の採用支援に特化した部署だ。東京2020オリンピックが開催されるはずだった2020年の初め、私はすがる思いでこの窓口を訪れていた。

当時の私は、採用担当者として駆け出しだった。それまでは事務方として縁の下の力持ちに徹していたが、業務の幅を広げるために取り組み始めたのが採用だった。社員十数名の、電気を扱う小さな会社。社員の平均年齢は上昇の一途を辿り、久しく若者を見ていない。求人を出しても音沙汰無く、挙句の果てには「誰でもいいから、とにかく人が欲しい」と言われる始末。そんな状況を聞いた窓口の担当者は、様々な支援を提案してくれた。そんな温かな対応に励まされ、私は動き出した。

活動を始めて最初に考えたことは、建設業の採用が難しい理由と、業界の魅力と誇りについてだった。私のイメージとしても、建設業＝3Kでしかなかった。しかしながら社員の働く環境は、既に随分と改善がなされていて、昭和の体育会系のノリや荒ぶる職人たちというイメージとも違うのだ。それでもやはり一般的なイメージが変わらない限り、建設業に興味を持つ人は少ないままだろう。そこを変えなければ、という結論に至った。

そこでまず、会社で一番の古株社員に話しを聞いてみることにした。25年以上この業界に携わってこられた理由は何なのか?その社員は答えた。「自分は未経験から電気の道に入ったが、この道は何年経っても頂上に辿り着ける感覚が無い。技術は日進月歩で進歩し続けているので、新しいものが出る度に自分はまた初心者として勉強することになる。その仕事の奥深さが自分にとっての魅力だと思う。そして、自分の仕事によってお客様から感謝されることが嬉しいし、人々の当たり前の日常を陰で支えているのが自分達だという誇りを常に持っている。」と。それを聞いた私は、初めてその社員のことを心底カッコイイと思った。多かれ少なかれ、建設業に携わる人々は、こういうプライドを持っているのではないだろうか。その姿を伝えたい、伝えることが私の使命だと確信した。

それから、私のプレゼンは変わった。社員の口から仕事の魅力や誇りについて語ってもらえるようなスタイルにした。普段は見せない仕事への熱い思いを、大勢の前で語る彼らはとてもカッコ良かった。そして、最後に「採用担当者としては、単に人が採れればいいのかもしれません。でも、私は違います。私はこの建設業に携わる人達の魅力や誇りを皆さんに伝えることで、業界のイメージを変えていきたいと思っています。日本のモノづくりには、世界に誇ることのできる技術力があります。それに興味を持つ人を採用し、この社員達のように仕事に誇りを持てるよう育成していくことが、当社の願いです。」と伝えた。

そんな地道な活動が実って、2年の間に5名の若者を採用することができた。入社の動機は様々だったが、皆この業界に希望を持って入ってきてくれた。伝え方を変えただけでこんなに変わるものなのかと、私自身が一番驚いている。

今年の年度の変わり目頃に、23番窓口の担当者から久々に連絡が入った。「コロナ禍で失業など労働市場に変化はあるものの、建設業の採用が厳しいのは相変わらずです。」と書かれていた。それに返信する形でここ2年の採用実績を報告したところ、大変驚かれて「ハローワークの仕事がなくなりそうです。今度、企業向けに採用活動に関するセミナーを行うので、是非皆さんの前でお話しして下さい。」と返ってきた。2年前に相談で窓口を訪れた私が、今では採用に困っている企業を前に話すようになるとは、誰が想像できただろうか。

改めて、建設業の魅力について考えてみたい。建設業は「つくる」と「まもる」に分けられる。つくる人達は、よく工事現場で見かける。私には成人になる息子がいるが、幼い頃は重機や大型車両が大好きで、工事現場巡りをしては、二人で遠くから眺めて「カッコイイね」と話していた。車も働く人もカッコ良かった。手を振ってくれた工事現場の人達は、息子の憧れのヒーローだった。そうだ、つくる現場の人達はヒーロー集団なのだ。そして今、私はまもる人達を陰で支えている。仕事に誇りを持ち、日々現場で頑張っている彼らもまた、社会インフラをまもるヒーローだ。日本のモノづくりを支え、黙々とミッションを遂行し、社会の安心安全をつくり・まもるヒーロー達の活躍こそが、建設業の魅力であり誇りではないだろうか。

今日も私は採用活動に励む。そう、毎日現場で頑張るヒーロー達の魅力を伝えつつ、新たなヒーローを探すために。

不動産・建設経済局長賞

「私自身は〝施工途中〟」

金澤（かなざわ） 優花（ゆか）［佐藤工業株式会社］

なんとなく、ただ、なんとなく、建物を造る仕事がしたい。近所に建った幼稚園を見て、そう思った。深い理由や、幼い頃からの憧れを抱いていたわけではなかった。むしろ、幼い頃から教師になりたいと、大学に進学したが、教壇に立つ夢を諦め、今はこうして、地上十二メートル以上もある足場の上に立っている。

『〝きつい〟〝汚い〟〝危険〟そんな環境での仕事を選ばなくても、もっと他にあるだろ。どうしてそこまで現場監督になりたいの』

と言った父に、

『なんとなく、ただ、なんとなく』

と言ったものの、割と本気で現場監督になりたいと思ったのは、間違いないだろう。

新型コロナウイルスによる「就職氷河期」と言われた中、運が良かったと言っていい、私は、第一志望であった会社に入社した。しかし、私には女性技術者の先輩社員がいない。それは、入社前から知っていた事で、私にとって、大した問題ではなかったが、少し不安でもあった。私が初めて配属された現場は、特別支援学校の新築工事。ＪＶで、他社ではあったが、女性の技術者がいた事、また時々現場に入場する型枠大工さんの中にも女性がいた事、新入社員の私にとっては、心強かった。そして、私と同期二名が配属された現場の先輩社員は皆「男性だから、女性だから」と区別することなく平等に接してくれた。

ある時、四メートルの単管パイプを別の場所へ運ぶ事があった。同期が余裕で三本持つのに対して、私は頑張っても二本。悔しいが、力ではやはり男性には勝てないと実感した。

『金澤は大変だからいいよ』

同期同士の優しさではあったが、その言葉を裏目にしか取れない私がいた。私も頑張れるのに…。でも、意外と力仕事の監督業は私に向いていないのか、同期の優しさが、逆に私を悩まし、悔しくて、涙を流す時もあった。

そんな時、私の考えが大きく変化した出来事があった。同期が別の作業をしていて、一人でまた四メートルの単管パイプを十本程運ばなくてはいけなかった。一回に運べるのは二本…。五回は往復しなくてはならない。だいぶ時間と体力を要すると思っていた矢先、大工の職長さんが「一緒に手伝ってやるよ」と三本のパイプを一緒に持ってくれた。効率を考えるならば、私が二本、大工の職長さんが三本持った方が明らかに効率はいいはず…。でも、これには、理由があった。

『金澤さんさ、誰かを頼る事嫌いでしょ』

正直ぞっとした。間違いない。私は、昔から、頑固なところがあった。人に頼るのがどこかかっこ悪い、そう思っていた私がいた。

『でもね、手伝って貰ってもいいですか。って言えばみんな手伝ってくれるし、見た目怖い奴も、チャラい奴も居るけれど、みんな良い人達ばっかりだから。もっと誰かを頼っていいんだよ。そしたら、仕事のやりやすさってきっと変わると思う。色々、試行錯誤しながら金澤さんのやり方を見つければいいんじゃないかな』

この時、私の中で、誰かを頼る事は、かっこ悪い事と決めつけていた固定概念がほぐれた瞬間だった。

社会人二年目になった今、重い物を持つ事も、出来るようになった事も少しずつ増えた。もちろんその陰には、たくさんの職人さんが私に協力してくれて、知識・知恵を教えてもらう事が出来たから。先輩社員に沢山のアドバイスをもらうことができたから。私は少し成長する事が出来た。そして何より、あの大工の職長さんと出会う事が出来て、あのタイミングで、あの言葉をかけてくれたからこそ、私は少しだけ変われた気がする。

あれから一年が経つ。コンクリート打設時、段取りが悪くて職人さんに怒鳴られた事。斫り墨の寸法を間違い、支柱が納まらなかった事。施工状況の写真を撮り逃し、先輩社員に怒られた事。思い返せば、本当に色々な事があった。ただ、どんな時も、〝竣工〟という一つのゴールを目指していたのは、私も、先輩社員も、そして、何百人もの職人さん達も、皆、同じであった。だからこそ、〝竣工〟という一つのゴールを迎えた時、達成感、充実感を味わう事ができたのだと思う。

この建物と共に成長することができただろうか。竣工した建物を見て、私自身に投げかけた問いだった。ただ、未だにその問いに対しての答えは出ていない。だから、これからもこうして、竣工を迎える度に私自身に問いかけたい。そして、『金澤さん、元気でやってたかい』とまたどこかの現場で、あの大工の職長さんと会う事ができたら、少しは成長した私の姿を見せたい。

私自身を〝施工〟する上で〝失敗〟は当然であるが、決してそれは〝施工ミス〟ではない。〝挑戦〟という名の〝施工途中〟である。私自身の〝竣工〟を迎えないために、常に、私自身は〝施工途中〟でありたい。

不動産・建設経済局長賞

女性施工管理者として働く

南雲（なぐも） 文音（あやね）［株式会社巴山組］

二年前の私は、期待と不安を抱きながら、建設業へ進むことを決意した。文系の学科を卒業した私は、建設業に対して、期待より不安の方が大きかった。調べるたびに出てくる「３K」。建設業は、男性が活躍する場というイメージを持っていた。しかし、二年目を迎えた今、私は次世代に「建設業は女性も活躍できるのだ。」と伝えたい。

今の会社に入り、一か月間の新入社員研修を終え、現場配属が決まった。現場に出ると、想像していた建設業と全く違うものだった。未経験で何も分からない私にやさしく教えてくれる現場の作業員さん、「次会う時はきっと立派になっているよ。」と応援してくれる協力会社の方々、初めて使うピカピカの安全帯や女性専用トイレなど、充実した環境での仕事に、入社前に抱いていた不安はなくなった。もちろん、暑い日や寒い日、土砂降りなどの条件の悪い中での現場作業、男性との体力差を実感し、悔しい思いや大変な思いをすることもあった。しかし、毎日知らないことを勉強できる日々にやりがいを感じた。

初めてひとりで一から図面作成を行ったり、女性目線で安全管理や看板制作を担当させていただいたりする日々に、チャレンジすることの大切さや、女性ならではの役割もあるのだと学ぶことができた。

入社一年目に担当した現場で、私は竣工動画の作成にチャレンジした。写真管理を担当していた私は、様々な角度から施工状況が把握できるよう、日々の写真管理を努めた。また、竣工時が積雪時期であったため、現場での検査ができず、動画で施工前から竣工までわかるように動画作成を心がけた。何度も作り直し、帰りが遅くなることもあった。しかし、完成した動画を上司や発注者に見てもらい、「工事の流れが良くわかっていいね。」とお褒めの言葉をいただいたとき、私は達成感を感じ、チャレンジしてよかったと心の底から思った。

完成した動画を振り返ると、現場の作業員さんの表情や、構造物ができていく様子、完成した道路に車が通行している様子など、現場で働いていた様子を思い出し、大変だったことも一瞬で楽しい思い出へと変わった。

この経験を通して、入社前と建設業のイメージが180度変わり、女性も活躍する場所を見つけることができるのだと実感した。

そして、私はさらにチャレンジしたいことがある。それは、結婚や妊娠、出産を経ても建設業を続けることである。私は今年の11月から産休を取得する。今まで得た経験から、出産後も建設業を続けたいと思い、復帰することを決めた。

そのために私は、建設ディレクターの資格取得に挑戦する。建設ディレクターとは、ＩＴスキル等を用いて工事の資料作成を行う、現場とオフィスをつなぐ新しい職域のことである。

入社前は、女性のライフスタイルと建設業の両立は難しいのだろう、もしその時が来たら仕事を辞めなければならないだろうと考えていた。会社に相談したところ、建設ディレクターの資格取得に挑戦してみないかと声をかけていただいた。私は、今まで現場に出て学んだことを活かし、次は現場の方々や技術員の皆さんを支えながら活躍できるような立ち位置を見つけたいと思い、資格取得に挑戦することを決めた。

私は建設業という道を選んだことによって、建設業に対するイメージが変わり、チャレンジすることの大切さを学ぶことができた。建設業に少しでも興味がある人がいるならば、私は皆さんに、「イメージや性別で、建設業で働くということを、選択肢からなくさないで欲しい。建設業には、想像をはるかに超える達成感ややりがいがたくさん詰まっている。」と伝えたい。

建設業は、普段毎日使う公共施設や、道路を自分たちの手でつくりあげることができる仕事である。そして、その中で活躍できる場所は、自分で見つけることができる。そんな仕事に就いていることを私は誇りに思うと同時に、女性施工管理者として現場を担当させていただき、新しい職域に挑戦できる環境に感謝したい。

私はこれから、出産や育児と建設業の両立にチャレンジしていく。そこから、人々の生活に寄り添えるだけでなく、自分自身の生活にも寄り添える建設業になっていくことを目指したい。

女性施工管理者だけでなく、性別を問わずに育児と仕事の両立が当たり前になっていく現在、今後増えていく女性施工管理者のロールモデルとなれるよう、自分自身の成長のため、さらに、建設業の魅力を伝えられるよう、挑戦し続けていきたい。

優秀賞

わたしと建設業

佐藤（さとう） 夏輝（なつき）［株式会社橋本店］

「どうして現場に出ようと思ったの？」建設業で働き始めて4年目になる私が現場で一番聞かれた質問です。『たくさんの人と関わって仕事をしたい』あとは『私は1日じっとデスクワークするの向いてないだろうな』建設業に飛び込んだ理由はそんな些細なものでした。女性が少ない業界であること、そんなイメージはもちろんあったもののいざ働いてみると建設業に携わっている人たちでさえ女性は珍しいというイメージが抜けていないのだなあと実感する日々を過ごしています。世の中の働き方改革を推し進める流れの中で建設業も労働環境の改善がなされていますが、依然として働きやすい業界であるといったイメージを持たれることは少ないのが現状だと感じます。そんな建設業に飛び込んでまだたったの3年ですが、振り返れば建物をつくるうえでの困難や葛藤そして喜びを何度も感じた3年間でした。『現場管理って、なんとなくかっこよさそうだよな』そう思っていた学生時代の私に声を掛けるなら、『そんなに甘くはないのだよ』まずはこれだろうと思います。現場管理の仕事は技術的なことはもちろんですが地味でちょっと大変な作業の積み重ねです。雨が降っていようが、どれだけ太陽が照りつけていようが、一日外で作業し続けなければいけない日もあるし、作業の特性や品質をまもるために夜遅くまで現場にいなければならないこともあります。正直にいえば『私はなにをしているんだろう』こう思ったことも少なくありません。しかし、それらの作業に無駄なことはひとつもなくて工事が進んでいった先に地味でちょっと大変な作業たちがスッと線でつながる瞬間があるのです。その繰り返しが建物を建てるということなのだ、3年働いてそれが何となく体感できるようになったと思います。

建設業は前述のとおり労働環境といった点では他業界よりも発展の余地が大きく、業界全体での改善にむけた制度や意識の改善が急務であると感じます。私のような現場管理の立場から、そして実際に建物を作りあげる作業員さんたちの立場から、この2視点から考えてみるとそれぞれに抱える問題があるのだなと感じます。私たち現場管理の立場にとっては施工者だけでなく発注者・設計者を含めた業界全体としての意識改革が必要だと考えます。工事が施工環境や天候と共に歩む"なまもの"であることを認識し、適正工期を遵守するための制度を整備し共有することで初めて現場での週休2日、長時間労働の改善へ近づいていけるのではないでしょうか。作業員さんたちにとっては雇用条件の改善が一助になると感じます。建設業界全体として給与が日割り換算であることが通例といった認識が根強いことで作業員さんや協力会社自体が週休2日に対して前向きでないことも多いのではないかと感じます。近年整備されている建設キャリアアップシステムの様に個人の能力を適正に評価する制度の普及推進に併せて賃金形態の見直しを行うことで業界全体としてワークライフバランスを大切にする職場づくりを進めていくことが大切であると思います。

このようにさまざまな課題と共に歩んでいかなければならない建設業ですが、街を創り、そして守り続けていくという大きな使命をもった魅力ある産業であるということも身をもって感じます。多くの人たちの手から生み出される技術の積み重ねが建物を、街を創っていく瞬間に立ち会える現場管理という職業は確かに多くの困難と共にあります。しかし完成した建物を目の前にしたときのあの達成感とやりがいがきっと多くの技術者を建設業のとりこにしているのだと思います。私自身まだまだ学ぶことが山積みの毎日ですが、久しぶりに会った作業員さんに『お、ちょっとたくましくなったな！』といってもらえたり現場で作業員さんと頭を悩ませた場所がきれいに仕上がると、少し自分を誇らしく感じます。学生時代の私にもう一言、そしてこれから建設業に飛び込もうとしている仲間たちに一言いうならば『地味で大変なことも多いけれど、建物が建つこと、街をまもることの尊さをこんなにも肌で感じられるのは建設業の特権だよ』こんなところでしょうか。

私にものづくりの大変さとそしてなによりも感動を与えてくれる建設業の更なる発展を祈って。

優秀賞

現場にある『生』

猪俣 夏来［株式会社巴山組］

私は去年の4月、中途入社で総務部として建設業界に入社した。前職はマーケティングの仕事をしていたが、縁あって今の会社に入り、建設業に携わらせてもらうことになった。一年間従事してみて、そのギャップの大きさから戸惑うことも少なくなかったが、それ以上に、とても刺激的な一年を過ごすことができた。その様な全くの畑違いだった建設業界で、現在は二年目を迎えている。

担当業務としては、経理・労務・人事を包括的に担当している傍ら、社内で現在動いている現場の安全パトロールにも定期的に参加させて頂けており、自分の中では現場やそこで作業する方々の状況を肌で感じられているつもりでいた。

しかし、入社1年目の冬が始まるころ、その考えを改めたいと感じた出来事があった。

その頃は、人事担当としての採用活動が本格化する時期に差し掛かっており、大学生向けの夏季インターンなどで得た反省点を踏まえて、企業説明会の準備などに追われていた。現場の安全パトロールにお声がけを頂いても、他の業務がバッティングしてしまっている事が多くあり、現場で勉強させて頂く機会も減っているタイミングであった。

そんな中、大学生向けのインターン活動の一環として、弊社で施工管理を担当している若手社員と学生さんとで座談会を行う場をセッティングした時の事である。

建設業に興味がある学生さんが集まっているということもあり、業界の事や会社の事について非常に多くの質問が挙げられていた。そんな中で、学生さんの一人が「施工管理の仕事でやりがいを感じるのはどんな時ですか。」という質問をしてくれた。

その時、弊社の若手社員は少しだけ考えた様子だったが、すぐに一言こう答えた。

「現場って生きているんです。」

そのままその社員は、

「昔から先輩社員に、現場は生きていると教えられてきました。ただしばらくは実感が湧きませんでした。でも毎日現場に通って業務を行う中で、特に天候が不安定な時や、工事日程が佳境を迎えた時などに、強く『現場は生きている』と感じるようになりました。現場の状況にもよりますが、今では毎朝現場を見るたびに状況が変わっていると感じる時もあります。その様な日が続くと、本当に現場って生きているって思うようになるんです。毎日違う表情を見せてくれる現場に立つことは、もちろん楽しい事ばかりではなくむしろ辛い事の方が多いですが、それでも現場と向き合いながら自分たちの作りたい物をしっかり作っていくことが自分にとってはたまらなく面白いと感じます。」と続けた。

建設業の魅力がダイレクトに伝わってくるような返答だった。それを聞いていた学生の方々のリアクションも非常に大きかったのはもちろんだが、その座談会の進行役だった私も、心を揺さぶられる様な感覚になったことを今でも鮮明に覚えている。

他方で、定期的な現場の安全パトロールに同行させてもらっていただけで、日々の現場対応について分かったつもりになっていた自分をとても恥ずかしく感じた。その日から考えを改めて、できる限り業務を調整し安全パトロールに同行する様になった。

その様な経験を得てから現場に赴くと、今までとは違いその日の状況なども加味しながら現場を見ることができるようになってきた。今でも現場が生きていると実感することはできていない。しかし、降雪時期の安全パトロールの際に、雪景色の中にある現場を見て、少しだけ弊社社員の言葉の意味だけは窺い知れた気がしている。月並みだが、改めて様々な環境変化と対峙しながら日々の業務を進めてゆく、その積み重ねの向こう側に、

「現場は生きている」

という言葉があるのだと思う。私は業務上もしかしたら、今後も現場が生きているという感覚を体感できないまま定年を迎えてしまうかもしれない。しかし、今後もそれらを少しでも感じ取れるよう、現場に赴いて勉強を続けていきたいと考えた。

無機質な話題やニュースが多い現代で、同じく無機質で厳しいイメージが持たれている「工事現場」という場所にはまさに『生』が隠れていて、それらがたまらない魅力ややりがいを持っているということを次の世代に伝えていくということは、建設業に携わり、採用活動を担う者の使命だと考えている。

その使命をしっかりと果たすためには、建設業に対して、表面的な理解だけでは不十分だと考えている。業務上では直接現場に関われなくとも、現場に向き合う心を強く持ち続け、これからも仕事をしていきたい。

優秀賞

チームで実感！わたしの成長

中林（なかばやし） 八恵子（やえこ）［加賀建設株式会社］

「資格や経験がなくても、やりたい気持ちがあればいいんだよ！」この一言で私はこの会社に入ることを決意しました。

私は以前、販売などのサービス業で勤務していました。転職を考えていた際、「これから長く勤めるなら、資格に繋がる仕事がしたい」と思っていたところ建設業と出会いました。

当時の私にとって、「建設業」というのは資料で読んだ程度の知識しかありませんでした。前職とは全く異なる業種であったため、飛び込むことに大きな不安もありましたが、面接で聞いた社長の一言が新たな世界に挑戦できることへのワクワク感に変えてくれました。

入社して間もないころ「チョウハリ出すし、クイとヌキ、あとカケヤ準備して。スケールも持っとる？レベルとスタッフもね。」と話しかけられました。

しかし、何を言っているのか全く分からず、まるで外国にいるかのような感覚になりました。私はこのような外国語の意味を先輩や周りの人たちに聞いたり、言葉の意味を調べることに精一杯で、現場に出てもどう動けばいいのか分からず、毎日歯痒い思いをしたことを今でもよく覚えています。

また、前職では年間を通しての業務内容が決まっており、年々できることが増えていくにつれて自身の成長を感じることができたのに対し、建設業では同じ工事を担当することはほとんどなく、毎回新たな工種があるため、前回までの経験をうまく活かせず、自分は成長できているのかと自信を失うことばかりでした。

そんな私も、入社から数ヵ月たった頃には少しずつ言葉に慣れ、内容が分かるようになり、上司や協力業者の人たちの会話にもついていけるようになりました。

ある日、作業所長に今回の工事について「どういう順序で進めていったらいいと思う？あなたの意見は？」と聞かれました。経験も知識も浅い私の意見は必要とされていないと思っていたため、この質問にとても驚きました。私なりの考えを伝えたところ「そうやね。その順番でやるのがいいかもしれんな。」と意見を聞き入れてもらえました。

前職では仕事を効率よく進めるための、ルールやマニュアルがすでに出来上がっており、自分の考えを表現する機会はあまりありませんでした。そのため、私自身も考えを表現することに対して苦手意識をもっていましたが、今回意見を聞き入れてもらえたことで、「私も意見を言ってもいいんだ！」と苦手意識を少し克服することができたのです。

実際に自分も関わることのできた順序で現場作業が行われスムーズに進んだ時には、初めて『チーム』の一員として認められた気持ちになり、とても嬉しく、やりがいを感じたと同時に自信に繋がりました。

私はこの経験を通して、知識だけではなく、自分自身も成長することができました。そして、その過程で一つ気づいたことがあります。それは、現場で大切なことは互いの想いを共有し理解を深めること。そして、これこそが『チーム』になるということです。

建設業は現場が変われば、関わる人も変わります。土工・型枠工・鉄筋工... いろんな職種の人たちが全員で一つの工事を創り上げているのが建設業です。職種が違うだけではなく、中には、話が上手な人、静かな人、不器用な人、と性格も様々です。時には意見がぶつかることや理解できないこともありますが、同じ会社の仲間同士だけではなく、協力業者の方もみな同じように互いを想い合うことができるのは、建設業という『チーム』ならではだと思います。そんな『チーム』だからこそ、私のような「未経験・資格なし・女性」にも偏見を持つことなく接してくれ、一員として働けているのだと思います。

建設現場では施工のことはもちろん、安全、品質、原価、工程などの管理について、自分が想像していた以上に覚えなければいけないことがたくさんあります。今は未熟な私ですが、これからもこの業界でたくさんのことを学んで『チーム』に貢献し、そしていつかは『チーム』を先導するリーダーになれたらと思います。

優秀賞

建築は幸せの中にある

石橋（いしばし） 美希（みき）［但南建設株式会社］

私は、三十歳を過ぎてから建築の道へ進むことを決めました。

高校生の頃から興味はあったのですが、『建設業界は男性社会』というイメージが強く、真剣にその気持ちと向き合うことなく高校卒業後は全く別の業種へ就職しました。

そして、結婚・出産を終え、社会復帰を考えた時に目にした求人は、『設備会社での積算・図面作成』でした。

建設業界で働く周りの知り合いに、女性でもできる仕事なのか、子育てをしながらもできるのか等相談し、男性が多い業界で、知識がないと話にはならないが、繊細な作業が向いている図面作成などは女性でも出来ると知り、その求人に応募しました。

子どもがまだ幼いこと、学校行事や急病もあり得ることを伝え、パート勤務で働かせてもらうことになりました。子どもの入園に合わせての就職だったので、働くまで三カ月程ありました。その間に設備に関すること、Jw_cadの使い方を子どもが寝た後に勉強し、できる限り知識を頭に入れました。とてもワクワクしながら勉強していたのを思い出します。

そして、入社し会社の方々にいろいろと指導していただいたり、実際の現場を見たりと様々な経験をしました。図面記号も分からない、材料も何に使うか分からない、建設業では当たり前な現場管理費等の意味も分からない、こんな私に厳しくも優しく指導して下さいました。

そんな日々を送り、設計士が描いたたくさんの図面を見るたびに、すごいな、こんな図面を描けるようになりたいなと思うようになりました。

『建築』は設備を含めたくさんの知識が必要で、建築士資格も進学した方がいいというのは分かっていたので、学費や生活費、今は子どもにも手がかかる時、きっとそんな簡単に無理だよね、と自分に言い聞かせながらも、インターネットでいろいろと『建築』について調べていました。

そんな時、自宅から車で一時間程度の場所に、卒業後に二級建築士の受験資格が得られる建築学科がある職業訓練校のことを知りました。学費や、給付金のこと、通学時間を含め必要時間等、いろいろと調べました。今のパート勤務に比べ、一時間程保育園の子どものお迎えは遅くなるけど、給料と変わらない程度の給付金も貰え、学費もひと月一万程度だったので無理のない進学が可能だと思いました。

そして設備会社の方々の『いつまでもチャレンジすることは良いことだ』との後押しや、家族の応援もあり、三十歳という節目を機に進学することを決めました。

十五年以上ぶりの受験勉強に面接練習、まさかこの歳で大学校に進学するとはと自分でも驚きましたが、無事に合格をしました。一緒に学ぶ学生達は、もちろん私より一回り年下の男性の方ばかりで不安もありました。しかし、自分自身の興味のあることを一から学べるということがとても楽しく、歳を重ねてからの進学だからこそのやる気に満ちていました。講師の方々も実際に設計事務所をされている先生や、現場管理を長年されてきた先生方だったので実務の話もたくさんありました。周りの学生たちも私に気を使いながらも、仲良く同じように接してくれ充実した二年間になりました。卒業の際には、子育てをしながらの優秀な成績で建設業界の女性活躍のモデルになるということで、学校賞も頂きました。

そして今、総合建設会社の住宅部で設計の業務をし三年目になります。業務の内容は、主に確認申請や長期優良住宅、省エネの一次エネルギー計算等の図面作成から申請業務です。申請先とのやり取り、施主様との打合せや、協力会社との打合せ等もあり、たくさんの方々と接する機会があります。住宅部では、営業・設計・工務と業務が分かれているので、もちろん社内でもたくさんのやり取りがあります。

調べても分からないこと、知らないこと、まだまだ未熟と感じることも多くあります。責任、焦りや緊張もあり、辛い時も正直あります。しかし、いつか夢見た図面を描けるようになりたいという夢が実現し、その図面通りに家が建っていく、そして施主様の嬉しそうな幸せな笑顔に触れる、そんな仕事が出来ている日々が楽しく思います。

女性だから、母親だから、時間がないから、お金がないから。ここに来るまでたくさんの逃げ道はありました。周りの人に「進学するなんて」「好きなことばかりして」と嫌味を言われたことも多々あります。

でも今は小学四年生になる我が子が、『ママと同じ仕事をしてママと一緒に幸せになれる家を造る！』と同じ夢を持ってくれています。

『建築は幸せの中にある仕事。幸せな人が、幸せな時に、幸せを思い描いて、建物を建てようとする』

我が子を含め、次世代に伝えていきたい言葉です。

まだまだ知識や経験が必要な私、この奥深い業界でこれからも切磋琢磨しながらもやっていきたいと思います。

建設産業人材確保・育成推進協議会

令和４年度
高校生の作文コンクール

■趣　旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、将来の進路として建設産業を考えている高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒を対象に、建設業への思いや建設業を進路に考えるようになったきっかけなどを広く伝えていただく場として、作文コンクールを実施し入選作品による作品集を多くの方々に届けています。

「高校生の作文コンクール」は平成25年度から実施し、今回で10回目となりました。

■募集概要

応募資格	高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒
応募期間	令和4年5月9日(月)～6月30日(木)
応募テーマ	建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。 私たちの暮らしと建設産業　又は　私が描く建設産業の未来
応募総数	857作品

■作文コンクール入賞作品

入賞作品は、(一財)建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。

[作文コンクールWEBサイト]

https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/result.html

■選考委員

古阪秀三	立命館大学 OIC総合研究機構 グローバルMOT研究センター 客員研究員 建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
西山茂樹	国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課長
沖本俊太朗	国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課 建設キャリアアップシステム推進室長
上田国士	(一社)全国建設業協会 常任参与
樋脇　毅	(公社)全国鉄筋工事業協会 理事
奥地正敏	(一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事

2022 ESSAY CONTEST

国土交通大臣賞

幸せを創る職業

安間（あんま） 菜月（なつき）［静岡県立浜松工業高等学校 建築科 1年］

朝起きて、ご飯を食べ、学校に行き、授業を受け、帰り、お風呂に入り、寝る。人によって過ごす一日は違っていても、そこにあるものはいつだって「空間」だ。私たちはいつだって空間の中に生きているのだ。

家の近くに工業高校があった。進路を気にするようになった頃、私の父も兄も通っていたこの高校に興味を持ち始めた。最初は「家が近いから」という理由だったが、兄からの話や実際に高校の雰囲気を近くで見ていると、次第にこの高校に入学したいと思うようになっていた。当時インテリアに興味があった私は、抽象的ではあるが、内装に携わる仕事がしたいと思うようになっていった。その時ぐらいから同時に「空間」に対しても興味が沸き始めていた。浜工について調べていくうちに建築科があることを知った。資格も沢山取れるらしい。ただ、自分の夢が抽象的であったが故に高校三年間を専門分野に振り切ってしまっていいのか。というモヤモヤがずっと心の中にあって、中々一歩を踏み出せなかった。そんな私の背中を押してくれたのは、一つの記事だった。「誰かに楽しいを沢山届けるための遊び心満載の空間」。ある会社のオフィス移転の記事だったが、その記事を見て私の抽象的だった気持ちが「誰かの為にその人が一生を楽しく暮らせるような空間を作りたい。」という気持ちになった。建築科を目指そうと心に決めた瞬間だった。

誰かの一生を決める仕事に就く。「空間を作り上げる。」ということはつまりそういうことになる。それが家や自分の部屋だったら尚更だ。自分が過ごす空間は何よりも何処よりも安心ができて快適に過ごせる場所でなくてはならない。建築の仕事に就くということは、誰かの人生を任されるという事に匹敵するだろう。私はあの日読んだ記事にあったオフィスのように誰かにわくわく感を与えられ、笑顔を作れるような空間を作りたい。そしてその空間が楽しい空間であれば、そこでどんなことがあろうと必ず記憶に結びついていく。沢山の人が訪れるような公共施設から、一家族の一軒家。そして自分が作り上げた空間が笑顔に変わる瞬間をこの目で見たい。小さな一つの幸せを沢山創りたい。建築科に入ったからこそは自分の夢を実現させたい。人生を担う職を目指すからこそ、毎日、今日を全力で頑張る。そしてあの日の決断に後悔が残らないように、自分の行動に自信をもってこれからの毎日を過ごしていきたいと思う。将来の自分が誰かの幸せを創り、そこには記憶する空間があり、自分自身も笑顔でありますように。

不動産・建設経済局長賞

二人の祖父の影響

渡辺（わたなべ） 優斗（ゆうと）［福島県立二本松工業高等学校 都市システム科 3年］

私の両祖父は、土木や建築関係の仕事をしている。父方の祖父は大工である。父方の実家に行くと、建設現場で活躍する重機が十台近くあり、ビシっと並んでいる光景に迫力を感じる。休日の日でも祖父は私に「ゴメンな」と言い、鼻歌交じりに重機をいじっている。しばらくすると、家に上がって来ては、テレビで株の動きをジーっとみて、フッと薄ら笑いを浮かべている姿は、けっこう気ままである。

ところで私はというと、授業でバックホーの操作を楽しむなど、専門土木の学習に充実感を覚えている。しかし、かつて私はバックホーをパワーショベルと呼んでいたことがある。理由は、祖父がパワーショベルと言っていたからである。高校に入り土木の専門科目「土木施工」を学んでいると違和感が生じた。先生はこの機械をバックホーと言っており、正しい名称がバックホーであることを知った。この機械の特性を知るにつれ、土木施工の授業がますます好きになった。バックホーは操作が複雑で、私が操作するとカクカクしてぎこちない旧型ロボットのようになっていた。だが、ヘビ使いのように動かす祖父の姿はとても格好よかった。そんなものだから、仕事ももちろん早々と済ませてしまう。私は祖父の動き一つひとつに憧れを抱いた。その憧れは、私の高校入学を決めさせた大きな影響力を持っている。

一方、母方の祖父は架設現場でクレーンのオペレーターをしている。私が小さい頃の祖父は、土曜日の夜に出稼ぎ先から帰ってくる。帰ってくるなり、ゴツゴツした手で私の頭をなでて、ひと風呂浴びに行く。そして、夕飯を食べながら酒を飲み、テレビを見てリラックスしている姿を何度も目にした。

かつて、建設業は土曜日も出勤の企業が多かった。高校生になり、土木を取り巻く環境が改善されてはいるが、現状はまだまだ大変な部分もあるのだなと感じた。多分、多くの人は、土曜日の出勤を好まないであろう。しかし私は、それでも土木や建築が嫌になることはなかった。なぜなら、二人の祖父が見せる「この仕事が好きだ」という一つひとつの行動が大きく影響しているからだと思う。

建設業は人々が安全かつ快適で文化的な生活を送るために、これからも大切な産業であり続けなければならない。私はこれからも、二人の祖父の影響を存分に譲り受け、正しいものを誠実につくるという土木技術者倫理を醸成させながら、じいちゃんと爺ちゃんのような熱意と熱量を持った土木技術者になろうと考えている。

不動産・建設経済局長賞

未来を作る仕事

廣瀬（ひろせ） 一貴（かずき）［山梨県立甲府工業高等学校 土木科 3年］

私は高校卒業後、施工管理技士として建設業に携わりたいと思います。まだ就職に対して不安や焦りなどがありますが、現場で活躍されている歴代の先輩の話を聴くと不安や焦りよりも、現場で仕事をしたいという好奇心の方が強くなります。

建設業といえば住宅や公共施設などを思い浮かべる人もいると思いますが、地域の中に当たり前のようにあるトンネル、橋やダムに関わる方が私には強く魅力的に映ります。この当たり前のようにある構造物たちは私たちの生活の中で無くてはならない存在だと言えます。その中でも災害を防ぐものがあります。例えば津波には防潮堤、土砂災害には砂防ダムなど、これら防災施設は現代だけでなく昔からありました。それは甲斐の国の武将武田信玄が築いた信玄堤です。信玄堤は毎年雨期になると大水に見舞われ、せっかく耕した田畑が台無しになってしまうことが多かったそうです。その苦しめられる住民のために二十年の時間をかけて築かれた堤防が信玄堤です。そして信玄堤周辺は今でも語り継がれる立派な治水施設です。私はこのことに感銘を受けました。建設業とは、まさに未来を作る職業だと思いました。そして、このように自分たちが作ったものが地図に歴史に残るということこそが、建設業の一番の魅力であると私は思います。それは人々の記憶にも残っていく仕事です。何十年、何百年経っても地図を見るとそこに何が建っていたのかわかる仕事は建設業をおいて他にはないと思います。

もう一つの魅力は、多くの人と力を合わせて一つのことに向かっていくところです。構造物は一人で作ることが困難です。元請、下請あらゆる協力会社の方が協力して大きなものを作ります。一つの大きな工事をみんなで成し遂げたときに得たものは計り知れないと思います。

この職業にしかない魅力の反対側には苦労も数多くあると思います。例えば、現場監督さんと職人さんの意見の対立や意識の差などコミュニケーションの不足や勉強不足からミスや手戻りが発生してしまうなど、いくつか挙げられると思います。しかし働くことに苦労はつきもの、それを上回る魅力があれば、それはやりがいに繋がっていくはずです。

将来、私は施工管理技士として頼られる存在となり活躍したいと思います。そのための第一歩として高校在学中に2級土木施工管理技士の一次試験に挑戦し、必ず合格します。そしてこの誇れる職業に就き、仕事を通して社会に貢献できるよう頑張りたいと思います。

不動産・建設経済局長賞

建築界の未来

秋山（あきやま） 莉里花（りりか）［長崎県立長崎工業高等学校 建築科 3年］

建築産業に未来はありますか？建築業界は発展することができると思いますか？

様々な職種が機械化している今、私たちが学んでいる『建築』という分野は人間がいなければ発展することができません。しかし、今、建築業界は人手不足です。そんな中、私は未来の建築業界を担う、一人の働き手として、一人の人間として、そして一人の女性として日々、建築学を学んでいます。

私は小学校六年生の時に建築に興味を持ちました。きっかけは２０１６年４月に発生した熊本地震です。地震というものを肌で体感したのは生まれて初めてでした。そして実際に現地へ行き、地震の爪痕を肉眼で見るということも初めてでした。道路へ倒れてしまったブロック塀、散らばったガラス、山肌が見えてしまった阿蘇山。その被害の大きさは、熊本地震の脅威を物語っていました。

私が宿泊した施設は阿蘇ファームランドというところでした。本来ならば一般のお客さんで賑わう人気の宿泊施設です。しかし、そのときは違いました。

「早く家に帰りたい」と言う子供や「お客さんの邪魔になるよ」と子供を注意する母親、お客さん優先だからといってお風呂までの道のりをシャトルバスを使わずに歩くお年寄りの方たち。そこには、お客さんだけでなく、大勢の避難してきた方たちの姿がありました。その状況を見た私は、現地へ行っても何もできない自分に無力さを感じました。阿蘇で三日間を過ごしたのですが、その間ずっと自分にできることは何なのか考えていました。そして、自分が建築士になって地震に負けない丈夫な家、誰もがストレスフリーに使用できる避難所を作ろうと思いました。

そんな夢をもって入学した今、私には新たな夢があります。

それは感染症などのウイルスを排除することのできる家を作ることです。例えば、玄関に衛生空間を設けたり、玄関を二重構造にしたりするということです。私たちはコロナウイルスと共に入学し、コロナウイルスと共に学校生活を送ってきました。様々な行事が制限されてしまったり、中止になったりしました。しかし、なかなか終息することもなく、あっという間に三年間が過ぎてしまいました。正直、私たちの貴重な時間を返してほしい、なんで自分たちばっかり、と思う時もありました。沢山話して、沢山笑って、沢山学ぶ。そんな当たり前だった日々を突然奪われ、制限に縛られる毎日。これからの学生期間を過ごす人たちに同じ思いはしてほしくありません。

感染症などのウイルスを排除することのできる家。この夢が実現するかどうかは私次第です。そしてこれからの建築業界が発展していくかどうかは私たち次第です。未来は私たちに託されています。今よりもっと良い世の中になるように、私たちが私たちの手で未来を創っていきます。

不動産・建設経済局長賞

青春の橋

古財（こざい） 凜香（りんか）［熊本県立玉名工業高等学校 土木科 3年］

私が通学するときに一つの橋を通ります。その橋の下にあるお店で回転まんじゅうを買い、友達と話しながら帰っています。その橋は私にとっての思い出です。しかし、端のほうに雑草が生えていたり、ゴミが落ちていたりします。もし雑草が取れるなら取りゴミも回収したいと思っています。他にもコンクリートが欠けている橋もしばしば見ることがあります。私が住む町にも老朽化が進んでいて危ない橋ももしかしたらあるかもしれません。みんなが暮らしやすい場所とするには安全であることは必要な条件の1つだと思います。

私は将来、土木職の公務員として働きたいと思っています。そして今市役所の方と学校が共同して地域の橋の点検・清掃活動を行う計画が出ています。なぜこの計画が出たかというと、私の住む地域では3人の市役所の職員の方が活動されていますが、市の所有する橋は８００以上あり、作業が追いつかないと話されていたからです。今は東北の高校生が行っている橋の点検作業を参考にしながら計画を立てています。実際にその高校生が活動しているところの写真や、作業する際の資料を見ながらzoomを通して市役所の方と一緒に活動の計画を立てています。私たちが住んでいる地域がより良くなるように7月頃から橋の点検作業の活動を始める予定です。

この活動を通して私には心に決めていることがあります。それは思い出のある橋を作ることです。私が通っている橋のように、違う誰かにとってただ通る道ではなく思い出のある場所として記憶に残るような橋にしたいです。私たちに任された活動は清掃活動や橋の点検作業です。一番暑い時期ですがこの活動を通して地域の方や、その橋を通る方に少しでも貢献することができたらいいと思います。

私は高校を卒業したら土木職の公務員として働きたいと思っています。そのために資格取得や、市役所の方との活動など様々なことに挑戦しています。もし市役所に勤めることができたら建設産業に関わることが今までよりも多くなってくると思います。私は市役所志望なので、将来この夏に行った橋の点検作業の経験を生かして多くの人の記憶に残るような町づくりをしたいです。町の人々が久しぶりに道を通った時に「そういえばここでこんなことがあったな」「あの時面白かったな」と思い出し、楽しむことのできるような町を目指したいです。そして、地域の方に寄り添い、より良い街にできるように頑張りたいです。私が過ごした地域に貢献できるように活躍したいと思います。

優秀賞

繋がれる建築

木村 美友（きむら みゆう）［宮城県古川工業高等学校 建築科 3年］

建築科に入学した理由は、そんなに難しいものではなかった。昔から、自分の想像から絵を描いたり、物をつくったりするのが好きだった。建築科に入学して今まで視界の背景でしかなかった建物が私のサブメインになった。窓の名前や屋根の形、間取りを見て、設計者の方の考えや色々なものが心に入ってくるようになった。

法律や決まりがある中で、自分の設計をするのがすごく難しく感じた。自分らしさを出し過ぎると暮らし易さが劣ってしまう。私はありきたりな家を設計したくはなかった。私にしかできない、私の想像を形にできる一歩手前まで創りあげるのが楽しくて仕方がなかった。しかし、周りを見ると私より勉強のできる人、私が想像もできないような設計をする人が山ほどいる。そんな友達を見て、私には才能がないのかもしれないと落ち込むことが多々ある。

実際に工事現場を見学させてもらった時、難しい言葉なんて出てこなかった。ただただ「凄い」と心の底から思った。何十年も積み上げてきた経験や貫禄が目で見てわかった。私もあんな風になれるのだろうか。

建物は完成したらたくさんの人がその場所を歩くことになる。何か一つでも手を抜いたり、間違えたりしたら大きな事故を招くかもしれない。そんな建物を建設している先輩方を目の当たりにして、かっこいいと思った。不安よりも大きな憧れを持った。三年生になった今でも私は自分の未来が見えない。自分のやりたいことを優先するべきか、未来の収入について優先するか。どうすればいいのか分からず、不安に包まれる日々を送っている。まだ子どもの私が大人になることは出来るだろうか。不安だが、自分の未来に期待を抱いている自分がいる。先生から言われた「楽しくするかどうかは自分次第」という言葉が頭に残っている。建築の仕事は、人の命を扱う仕事のようなものだ。少しでも間違えれば大きな事故を招く可能性があるからだ。そんな大きな仕事が優しく生ぬるいわけがない。きっと私たちが想像できないほど厳しく大変な仕事だろう。だが、誰にでも出来るものではないと思う。建築を学んできた少ない人材の中で私たちが未来を繋いでいかないといけない。私は日本の建築物が好きだ。その伝統をこれから生まれてくる子どもたちにも繋いでいきたい。今でもこんなに建築を諦めずに勉強できているのは、建築が好きだからだ。この理由に嘘はない。これから先も正面から建築に向き合っていきたいと私は思う。

優秀賞

建設業から社会を変える

雨宮（あめみや） 蒼空（そら）［栃木県立栃木農業高等学校 環境デザイン科 2年］

「一緒に働くなら、外の世界を見てきなさい。」

私は、ものごころが付く頃から、父の背中を見て育ちました。私も手に職をつける時が来たら、父と肩を並べたいと思い、家族に将来について相談したところ、父は私に外の世界を見てくるように言いました。私の父は自営で、クレーンの製作や取り付け作業を行っています。父の会社は、決して大きい会社ではありませんが、機械器具の製造や建築の分野で地域に貢献してきました。その頃の私には、父が外の世界を見るように言った理由が理解できませんでした。

私は父の思いに従い、私自身が出来ることを増やすため、資格の取得や仕事で使う技術を外に出て学ぶことにしました。栃木県立栃木農業高校の環境デザイン科では、土木や測量だけでなく自然環境やSDGsといった、これから求められる分野を学べると思い進学しました。

高校入学後、測量の基本を学び、「全てのものづくりは、測ることから始まる」と先生方に教えて頂きました。長さを測ること、方向を決めること、高さを揃えることなど、実際に器械を使って技術の習得に励みました。高校に入学して1年が経ち、専門分野について勉強して、当時父が言った外の世界について少しだけ分かった気がします。父が外の世界を見てくるように言ったのは、家業を継ぐために一度家の外に出て、軸となる部分を自分で身につけて欲しいという思いがあったからなのではないかと感じました。

私の夢は、父の後を継ぐことから、家族と一緒に地域を支える会社を作ることに変わりました。父の会社は、現在のところ工業分野のみの事業となっていますが、環境デザイン科で学んだことを活かし、工業に加え自然保護活動や環境教育活動にも取り組みたいと考えています。外の世界にはまだ知らないことが多くあります。これから私は、外の世界を見るために大学に進学して、人脈と知識を増やそうと考えています。建設業は、社会を支える上でなくてはならない産業でありながら、高齢化や人手不足などの課題を抱えています。今後も、人手が減り続けると、個人の力では厳しい社会になっていくと思います。

この現状を踏まえて私は、高校や大学で出会った多くの人を巻き込み、地域の生活と自然環境を支える持続可能な建設業に取り組みたいと思います。高校では、多くの良き仲間に恵まれました。きっとこの先も支えになってくれると思います。大学では更なる知識の習得と人脈を広げ、地域を支える会社を作りたいです。そして、建設業界全体が他分野を積極的に取り入れ、持続可能な社会に向けて発展していくために、活動の場を広げ、社会に貢献していきたいです。

優秀賞

憧れの職業と未来への継承

島田（しまだ） 峻介（しゅんすけ）［栃木県立栃木農業高等学校 環境デザイン科 2年］

私たちの目に映る景色は、そのほとんどが建設業で作られたものです。今では、自然に作られた風景は、貴重なものとして扱われるほど少なくなりました。建設産業は、住宅やビルなどを建てる建築分野と、道路や橋などのインフラを作る土木分野に分かれますが、建設業があるからこそ、私たちの生活が成り立っています。

私は将来、土木関係の職業に就きたいと考えています。中学生の頃から、多くの人の役に立つ仕事に就きたいと考えていた私に「土木分野なら多くの人の役に立つ」と当時の担任の先生から教えていただきました。土木分野に興味を持った私は、栃木県立栃木農業高等学校の環境デザイン科に進学し、土木に関する施工や設計について勉強しています。土木に興味を持ってからは、日常生活でも目に映るものも変わりました。今までは、一切目にとまらなかったものが、土木職に就きたいと思うようになってからは、河川工事や舗装工事などがあると、自転車を止めて見るようになりました。高校２年生で、まだ土木について聞きかじった程度の勉強しかしていませんが、工事現場をみて「地盤を高くしているのかな」「材料はどこから持ってきたのだろう」と考えるようになりました。学校での勉強も、測量実習や土質試験では目的意識を持って取り組んでいます。

私は、暮らしを支える建設業についてもっと学びたいと考えています。高校卒業後は、４年制大学に進学し、インフラ整備の研究をしたいです。今は、知識や技術を学ぶ側ですが、将来は自分が新しい技術や工法を開発し、地域に還元できるような人になりたいと思っています。建築業界は、人手不足や高齢化などが課題となっています。私が通っている高校にも、民間の建設業の方が来て、建設業の紹介をしていただく機会がありました。その紹介の中にも、若手不足が課題と言われていました。ICTの活用等で、数年前と今の建設業のイメージは大きく変わりましたが、それでも若手の担い手不足が課題となっているそうです。

私は、学校の勉強を通して、建設業はチームワークが大切だと知りました。建設業の担い手不足は、ものづくりにおいて深刻だと感じます。そこで私は、地域を支えるために協力してくれる仲間を、高校と大学で作りたいと考えています。今あるインフラや建築物も、いずれは老朽化で修繕が必要になります。

また、土木や建築の需要がなくなることがありません。若い世代が、支えなければ今後の社会の発展は難しくなります。そのためにも、土木や建設に興味のある人が集まる高校や大学を通して、同じ志を持った仲間を集めたいと思います。そして、私たちの暮らしを、私たちで支えられるような建設業を目指したいです。

優秀賞

我々の生活と建設産業の関係

吉田（よしだ） 光翼（こうすけ）［千葉県立京葉工業高等学校 建設科（土木コース）3年］

私は建設産業に深く感謝している。道路や橋などの整備や補修、戸建住宅やマンションなどの建設、下水道や上水道の建設、管理。日本の産業や生活を支える縁の下の力持ちのような存在だと私は思っている。

戸建住宅やマンションなどの安心できる場所は人間にとって欠かすことのできないモノである。周りを壁に囲まれ、安心できる場所。雨や風、大昔なら野生動物などから身を守ってくれる安全な場所。安全安心な心落ち着く空間を作ってくれる建設産業には感謝しかないと私は思っている。

また、道路や橋などの社会基盤の存在も忘れてはいけない。建設産業のおかげで我々の日常の生活は成り立っている。

さらに、建設産業は芸術である。法隆寺や姫路城、日光東照宮など美しいモノがたくさんある。

これらの建築物は経済に大きな潤いをもたらす。観光地として、そこに観光客がくると、その付近にホテルや旅館、お土産屋などの生業が誕生する。それらを作るためにも建設産業は活躍する。その施設にお客さんが入ると利益を生み、更に経済が潤う。つまり建設産業はそれらを作ってから朽ちて壊すまでの全ての期間に利益を生む素晴らしい産業であると私は思う。

近年、日本では高度経済成長期の建物が一気に老朽化する問題がでてきた。昭和世代の建物が一斉に朽ち始め、社会問題となっている。この事態を私は不景気を緩和し、また建設産業の技術が更に進歩するチャンスなのではないかと思っている。建設産業は一つ一つの事業が大きい。この大きい仕事が一斉にくるということは、建設産業の需要が高まり、通常以上の利益がでるということではないのかと私は思っている。

さらに、既存の建物の寿命、つまり、耐年数を延ばすような新しい技術も生まれてくると私は思う。

また、日本は災害が多い国である。地震や火山噴火、洪水など、自然災害が多い。しかし地震が起きても壊れる建物はほとんどない。近年では洪水の際に船のように浮かぶ耐水害住宅も開発されている。このように建設産業は日々、人々の暮らしを守るために進化している。古くからの技術と新しい技術で人々を守り続ける建設産業を、私は尊敬する。

最後に、建設産業と我々は切っても切れない親密な関係なのだと私は感じた。人間がいる限り、技術も建設産業も衰え、途絶えていくことはない。これからも更なる進化を続けるであろう建設産業を私は尊敬し続ける。道路や橋などの整備や補修、戸建住宅やマンションなどの建設、下水道、上水道の建設、管理。日本の産業や生活を支える縁の下の力持ちのような存在だと私は思っている。

優秀賞

未来の建設産業

上岡（かみおか） 優牙（ゆうが）［東京都立葛西工業高等学校 建築科 2年］

私は大工になりたい。中学時代、進路を決めなければならない時期になった時、ふと、「大工になりたい」と思った。理由は、「木で何かを作りたい」と思ったからだ。大工の道を志すべく、在学中の工業高校に入学し、建築について学ぶ。1年程度学んだある日、先生のある教えが、印象に残った。「安全、安心」。最初にこれを聞いた時は何も感じていなかったが、建築について学んでいくうちに、「安全、安心」、つまり、「人々の暮らしを守る。人々の暮らしを支える。」というのが、建設産業において、とても大切なことであり、これからの建設産業の未来にあるべきものなのだと、自分の中で感じていたからなのかもしれない。それと同時に、私は安全な構造で、安心して利用できる建物をつくり、人々の暮らしを守りたい。そう思った。

現在、日本で懸念されていることとして、首都直下型地震や、南海トラフ地震が三十年以内にくると恐れられている。震度7は確実だろう。更に火災などの恐れも出てくるだろう。震度7にも耐えられ、耐火性にも富む住宅を建て、人々が安全、安心に暮らせるような、建物を建てたい。だから、学業に励み、実習にも取り組んだ。ただ、建築について学んでいるうちに「木造で、首都直下型地震は耐えられるだろうか。耐えられるかもしれないが、強度でいうと、鉄筋コンクリート造や鉄骨造の方が勝るだろう。更に、防火性も、鉄骨造や鉄筋コンクリート造の方が富むだろう。」と思いはじめている。実際、東京都で木造建築の建物は減ってきていると実感している。私は暮らす形態が変化しようとも、人々が安全で安心して暮らせる建物を建て、人々の暮らしを守りたい、人々の暮らしを支えたい、そう思っている。そのためには、鉄骨造や鉄筋コンクリート造などに関係する職種を志すべきではないのかと感じた。だから私は、改めて、鉄筋施工技能士などの道を志し、学業に励む。建物、つまり、住宅などは、私たちの暮らしにおいて、とても重要であり、なくてはならないものである。その中で、その住宅で暮らす人々が、安全、安心に暮らせる住宅を建てることを私は目指している。建設産業に関わっている人々は私たちの暮らしを支えてくれている。私も、その一人として人々の暮らしを支えたい、安全、安心に暮らしてほしい、暮らしを守りたい、というのをいつも心に刻みながら、今後も学業に励んでいこうと思う。建設産業の未来のために、私たちの暮らしのために。

優秀賞

未来のために

望田（もちだ） 奈歩（なほ）［山梨県立甲府工業高等学校 土木科 2年］

大人になったらなりたいもの。測量士。その夢を叶えるために建設業についてたくさん学んできました。そんな私が描く建設産業の未来は、偏見のない、女性でもなりたい人が増えるような建設産業です。私がこのような未来を思い描くようになった理由は、学校生活で不便だと思うことがたくさんあったからです。

そのひとつとして、女性が働きやすいように社会で叫ばれ、変わりつつある中、私の周りではあまり変化しているように感じられなかったことです。実感として、作業着のスタイルや器械の持ちづらさなど、女性にとって小さくも働きづらいと感じてしまう悩みが残る社会だと感じました。女性技術者の方と意見交換会を企画していただいた際に、周囲の理解とその方自身の働くための覚悟によって成立していることなのだと理解しました。体力面や体格の差は男性技術者には敵わない。だからこそ様々な工夫で仕事に取り組まれていることを知りました。

このような社会を変えていくために大切なことは、今ある課題をなくし、改善していくことだと思います。課題は、3Kや事故などのリスクにより人手不足になっていることが挙げられます。まず3Kの「キツイ・キタナイ・キケン」を改善していかなければ若者は建設業に憧れは抱いても仕事にしていきたいと思わないのではないのでしょうか。改善策として、電動ファン付き作業服や快適トイレなどを取り入れている現場があると聞いたことがあります。多くの現場で改善策を前向きに捉えていってほしいと考えます。山梨県などの地方こそ、人材不足で大変なので、すぐにでも対応してもらいたいことだと思います。そして事故の予防のひとつとしてフルハーネス安全帯義務化が挙げられます。死亡事故がニュースで取り上げられるたび、恐怖心が湧いてきます。死亡事故を無くすのは大変なことは承知していますが、事実年々減少していることやどのような予防策をとっているのかをもっと多くの人に知ってもらうことが大切だと思います。

このようにたくさんの工夫をし、課題を克服し、魅力を前面にアピールすることにより、建設産業入職を志す若者が増え、人手不足を解消することができると考えます。

併せて女性のみならず、誰もが動きやすい作業着や持ちやすく操作しやすい器械の開発、職場環境を整えて同時にアピールしてはいかがでしょうか。私たちが生活するのに必要な仕事であり、全ての人から必要とされる仕事に誇りをもって関わっていきたいです。

私の未来のために。

建設産業に夢を抱く人のために。

未来の日本のために。

優秀賞

自然と人と建築

野澤（のざわ） 春輝（はるき）［山梨県立甲府工業高等学校 建築科 3年］

私が甲府工業高校建築科に入学しようと考えたのは、小学生のころ完成したばかりの東京スカイツリーに興味を持ち、調べていく中で、安全な構造や装飾のほかに地域の歴史や伝統などの様々な要素をとり入れながら設計されていることに感動し、地域だけでなく、世界中の人々に愛されている様子を見て、私も人々に愛されるような建築物を建てたいと思ったからです。

私は、建設業界の未来を考えるにあたって問題が二つあると考えます。

一つ目は環境についてです。高校の授業を通して、建築物の部材や各部の名称や構造計算、建築物の設計と製図などの建築についての基礎的な事柄を学ぶ中、すべての分野で「環境と調和する」ことの大切さについて考える機会がありました。進行が止まらない地球温暖化や工事においての空気、水、地盤の汚染や資廃棄物などの多くの環境問題について学ぶとともに、資源リサイクルや型枠の再利用、木材の有効活用など具体的な改善策も学びました。ほかにも社会的に取り組んでいる「ＳＤＧｓ」に建設産業が積極的に参加し、持続可能な社会づくりに貢献していくことが重要だと考えます。環境問題についての知識が少なかった入学当初は、「人々が安全に快適に」ということばかりを意識してきました。しかし学年が上がり、建築について学べば学ぶほど、これらの問題が深刻で、解決に向けて真剣に考えなくてはならないと思うようになり、自分でも少しずつ調べるようになりました。学生だからこそ今起きていること、これから求められることを把握しておかなければならないと感じました。

二つ目は少子高齢化が進み、過疎化も進む中で地域のつながりである「地域コミュニティー」が減少していることも全国的な問題となっていることです。私は建築研究部という部活動に所属しており、大学や団体が主催するコンペティションに参加しており、「地域コミュニティー」がテーマとなったものに挑戦した経験があります。富士吉田市では、富士山や吉田のうどんや昔から続く織物という全国に誇れる名産品がありながら、なかなか生かすことができていない課題がありました。それが原因で地域の職人さんが減少していきさらに知名度が下がってしまうという悪循環に陥ってしまっていました。そこで建築でアプローチを仕掛け、吉田のうどんと織物を掛け合わせた建築物を設計し、文化、住民をつなげるツールを提案しました。このように各地域の特色に合わせコミュニティーを促進する建築が必要だと考えます。

私はこれまで挙げてきた環境問題と地域の過疎化、少子化などの課題の解決に貢献し、環境、人、建築が共生できる持続可能な社会の実現に貢献できる建築士となることができるようにこれからも勉学に励んでいきたいと思います。

優秀賞

私を構成する

花村（はなむら） あずき［静岡県立浜松工業高等学校 建築科 3年］

私が中学二年生になった時、校舎が移転した。終業式の日に教室から見えた桜がすごく綺麗で、取り壊されるのは少し寂しかった。二年生の始業式の日、新校舎に初めて入った。まるで学園ドラマの舞台のように綺麗で、真白な壁は触れたら汚してしまいそうで緊張した。他校の友人に新校舎のことを聞かれたときは、誇らしくて自慢した。

校舎の移転、祖父母の立ち退きに際しての引っ越し、私自身も幼稚園の時にこの土地に越してきた。嬉しかったり、悲しかったり、心が揺さぶられた。こんなにも人の心を揺さぶることのできる仕事に感動し、憧れた。いつの間にか、私の将来設計の中に「建築」が組み込まれていた。

浜松工業高校の建築科に入学した。普通高校では学び得ない建物の構造や法律、構造計算について学んだ。登下校の際、少し遠回りして住宅街を進んだ。ロフトを作ったり、内壁を塗り替えたり、自室の模様替えをした。今度は、生活の中にも「建築」が入り込んできた。建築漬けの高校生活は忙しなく進んだ。コンペに挑戦した時、何を提案しても先生に否定されて心が折れそうになった。やっと課題が1つ終わっても、休む間もなく次の課題が出される。製図の課題を期限に間に合わせるために4日連続で徹夜した時は流石に「辞めたい」と思った。

今、高校3年生、進路選択を迫られる時期だ。私はいつまで経っても進路を決められずにいた。現場見学に行った時だった。共同事業体で作業している現場には、その日は、ベテランの作業員さんから去年高校を卒業したばかりの若手まで、延べ200名ほどがいた。現場には緊張感が走っていて、休憩室では疲れ果てた様子で仮眠している人がいた。こんな業界でこれから働いていけるのか。完全に委縮してしまった。質疑応答でベテランの作業員さんから話があった。仕事はやはりとても辛いらしい。それでも辞めずに続けられたのは、お客さんに感謝されることが何よりも嬉しかったからだそうだ。高校生活ですらこんなにも辛いのに、働き続けたいと思える職業に俄然興味が湧いた。

私は高校卒業後、建設会社に就職し、BIMの仕事をしたいと思っている。出前授業で、卒業生が建設会社のこと、担当業務のことを話された。その時初めてBIMという存在を知った。現場とは違い、ものづくりに直接関わることはない。設計とも違う。現場が工事を進めるために施工図やパースを作成する。表に出て目立つ仕事ではないが、現場を支える重要な仕事である。きっと私の知らない裏方の仕事がまだまだ沢山あるのだろう。改めて、建設業は一人では完結させられないのだということを実感した。想像して、それを図面におこす人がいて。いろんな人が意見を出し合い、試行錯誤を繰り返していく。現場では多くの人が汗水を流して作業している。老若男女問わず、全ての人が完成という一つの目標に向かってバトンを繋げていく。私もそのリレーにひとりの走者として関わっていきたい。

優秀賞

私たちが受け継ぐ

横山（よこやま） 芽依（めい）［岡山県立岡山工業高等学校 建築科1年］

学校で「式年造替制」を習った。特に学校では伊勢神宮の式年造替について習い、とても興味を持った。伊勢神宮では20年に1度、附属品も含めて一切が建て替えられている。そこで私はなぜ20年に1度なのか、もっと長い期間を設けてもいいのではないかと疑問に思ったため、調べてみることにした。

まず、なぜ20年という期間なのかはまだ正確には分かっておらず、諸説あるということが調べてみて最初に分かったことだ。だから私はその説の中の1つである、「技術継承説」に着目しようと考えた。

「技術継承説」とは、20年という期間は次の世代に宮大工や神宝製作の匠の技を伝えるための丁度良い期間だから建て替えるというものだ。また、20年以上空いてしまうと技術継承の確実性が落ちるためでもあるといわれており、私は納得した。現在、私たちが見ることができている伊勢神宮や春日大社などの神社は、今現在までに技術を継承した人、された人などの技術者のおかげだと私は考えている。他の説にあげられている老朽化した社殿を更新するなどの理由でも、結局は前の世代から受け継いだ技術が必要だ。このように何度も何度も受け継がれ、工夫をしながら建て替えられ、現在も形が残っているということは技術を正しく受け継ぎ、その時代に合った工夫を施すことができているということだ。この先も美しい神社建築の技術を受け継ぎ、守っていくには今の世代である私たちの努力が必要なのだと、この作文を書くにあたって思うことができた。そして、この思いを忘れずに今できることをしていきたいと思った。

また、この制度から現在問題になっている社会インフラの整備の維持や管理、更新の担い手不足に対して学ぶべき点もあるのではないかと考えた。昔から神様の居るところとして人々と関わってきたものを修繕する制度、今現在私たちに必要で密接に関わっているインフラ設備の整備、どちらも私たちに深く関わっていると言えるだろう。そして私がもう1つ共通していると考えている維持という項目についてだ。ただ建て替えるのではなく都市計画や町づくりなどをして歴史あるものを残したり、AIなどの最新の技術を駆使してインフラ整備や維持を行ったりするなど、保存していくということが今大事なことであり、必要であるらしい。だからこそ私は未来へ貢献できるように考え、自分から行動を起こしていきたい。

歴史的建造物の保全は私たちの生活にあまり関わりがないと思っていたが、今私たちが見ている建造物は何度も受け継がれ、建て替えられたり維持され続けたりしながら、私たちの生活を豊かにし続けている。私もただ見る人ではなく、1人の建築科の学生として造る人になりたいと強く思う。

優秀賞

働きやすい環境へ

美濃（みの） 優花（ゆうか） ［愛媛県立東予高等学校 建設工学科 2 年］

私は、建設の事について学ぶことが好きで、将来建設関係の職業に就きたいと思っている。だが今、建設業界は人手不足の職業・職種ランキングで、第2位になっていた。私は、この結果についてどうしてだろうと思った。

現在、IT化が進み「自動作図ソフト」「タブレットによる現場一括管理」「ホロレンズによる3D完成イメージの共有」「工事作業の人員の代わりになるロボットの導入」などといった機械や機能が発展している。そのことから昔の手作業メインの時より、工事の進行具合や、完成したらどんな家になるのかをタブレットで見たり、必要な時に必要な情報を従業員が瞬時に確認することができ、必要なデータをクラウド上で管理することで、優先すべき作業が可視化できるといったメリットがたくさんあり、働きやすくなったのではないかと考えていたからだ。だから、どうして今こういう状況になっているのか気になってネットで調べることにした。

調べてみると様々な理由が出てきた。「体力勝負の仕事であり、屋外の作業が多いため、夏は暑く冬は寒い、その上、力仕事ばかりであるという職場環境だから」といったものだ。私は大工工事と左官作業の技能検定、CAD検定、測量士補試験を受験してきた。大工の実技の練習では室内であったが、夏は暑く冬は寒いと感じた。左官作業では、洗い出し平板を作るときは、水をしみこませたスポンジで表面を洗い出していくときに夏は特に何も思わなかったけど、冬は水がとても冷たくて、この作業を冬にした時は少しきついなと思った。そのため、この理由には強く共感するところがあった。一方で、CAD検定や測量士補試験の勉強では、室内でエアコンを付けてしていたため大工工事や左官作業の実技の練習のように季節に左右されることなく勉強することが出来た。このことから、建設産業といっても季節に関係するものとしないものがあると思った。

このことから、私は将来、左官作業の時に使える水の冷たさを感じない手袋や、現在のIT化を利用して荷物を運ぶ時の効率化を図る補助器具、力仕事や長時間低い体勢で作業するときの体への負担を軽減できるような機械があったらいいと思う。そうすることで、左官作業で水を使うときにきついと思うこともなくなる。夏の暑い時や、冬の寒い時の力作業がこれまで以上に力が要らなくなり楽になる。そうすることで、「自分にも、もしかしたらこの仕事できるのではないのか」と思う人が増えて建設業界で働きたいと思う人が増えるのではないのだろうか。

建築とは「自分が設計したもの、建てたものが一生残り続ける」ということが一番の魅力だと私は思う。その建物を建てるうえで、今よりもっと働きやすい環境にするにはどうしたらいいのかをこれからも考えていきたい。

優秀賞

将来の夢と工業との出会い

永井（ながい） 詩音（しおん）［愛媛県立東予高等学校 建設工学科 3年］

僕は将来、設計に関する仕事に就きたいと思っています。僕は東予高校に入学するまでは、工業の仕事は大工などの体を使う仕事が基本であると思っており、筋肉の病気で足に障がいがあり車椅子を使って生活している僕には出来る仕事がないと思い込んでいました。しかし東予高校で3年間建築のことについて勉強していく中で、僕はＣＡＤなどを使った図面を書く設計という仕事に興味を持ち、パソコンを使って図面を書くことが少しずつ好きになりました。

僕が初めてＣＡＤを使ったのは、高校の体験入学の時でした。その時は、線などを書いたりする簡単な操作を習いました。僕は初めてＣＡＤを使ってみて、もっとＣＡＤについて学び、学んだ技術を使った仕事に就きたいと思いました。高校に入学して、より専門的に学ぶことができ、ＣＡＤの検定や障がい者の技能競技大会へ出たり、職場体験に行ったりとたくさんのことを学ぶことができたと思いました。中でも障がい者の技能競技大会アビリンピックと職場体験のことがとても印象に残っています。アビリンピックは東京のビックサイトで行われました。大会の内容は、制限時間３時間半でＲＣ造の建物を書くと言う内容でした。大会に出場して時間いっぱい頑張りましたが、課題を書き切ることができず、賞を取ることができませんでした。しかし大会に参加して、「自分と同じように病気を持っていても頑張ることができる」という自信と勇気を持つことができました。職場体験では、初めて設計事務所に行きました。午前10時から午後３時までと言う少ない時間での職場体験でした。職場体験を通して設計事務所の仕事内容や会社での雰囲気など、学校では習うことの出来ないような体験をたくさんすることが出来ました。

僕は高校生活の中で、２人の先生と出会いました。１人の先生は義足をつけている先生で、もう一人の先生は事故で足に怪我を負い僕と同じように障がいを持っている先生です。僕はその二人の先生から設計についてのことも教えてもらい、何よりもっと大切なことを教えてもらった気がします。体が他の人のように動かなかったり、病気を持っていても、社会に出ること自体には問題ないということを教えてもらうことができたと思います。僕もその先生たちのように、他の人のようにはいかなかったり、できなかったりすることがあるかも知れないけど、逆に自分の体が不自由なことを武器として、今後社会に出ても頑張っていきたいと思いました。

僕は将来、設計に関する仕事に就きたいです。家の図面を作っていく中で、どんな人でも不自由なく困ったりすることのない家を設計していきたいと思っています。設計に関する仕事に就くという将来を実現させられるように、残りの高校生活でたくさんの建築に関する知識や、住宅の設計に関する経験を積み、将来に生かしていきたいと思いました。

優秀賞

人と地球が共に進む建設産業

岩崎（いわさき） 愛華（まなか）［熊本県立球磨工業高等学校 建築科 2年］

10年後、20年後、私達はどのような環境で、どのような家で、どのような生活を送っているでしょうか。どのような道路を通り、橋を渡り、どのような快適な生活を送っているのでしょうか。近年、日本の内閣府で提唱されているSociety5.0の未来社会のコンセプトにより、技術の発展が進み、便利で快適な社会へ変化し続けています。昔はただの夢物語だった空飛ぶクルマも徐々に現実のものになりつつあります。これから先、どのような技術が発展し、どのようなものが造り出されるのか、考えるだけでとてもワクワクします。ですが、このような発展の中には、建設産業も含め、いい進歩もあれば課題も多くあります。その中で、地球全体の自然環境と共存した暮らしにフォーカスした、私が描く建設産業の未来は「人と地球と共に進む建設産業」です。「人」が生きてゆくために、暮らすために、移動するために、働くために、様々な用途で建物や道路、橋などの建設物は造られ、使われています。そのような建設物は、周りに与える影響が大きく、建設する際にはその地域の景観や自然環境への負担を減らす配慮が必要です。

「人と地球と共に進む建設産業」を目指すための私の考える理想像は、循環型による仕組みです。日本では、環境省で主に取り組まれている3Rがあります。循環型社会を目指した取り組みです。これを、建設産業にも反映させていくことで、人と地球が共に進んでいくための地球を目指していけると考えます。例えば、建物を強化構造にしてできるだけ長い間使い続けるリデュース、使わなくなった建物の建築建材を再利用するリユース、廃棄されるプラスチックや木材、ビニールを新しい建築建材やセメントとして使うリサイクルなどです。ですが、どのようなものにもメリットとデメリットが生じます。3Rを実現させるためには、リサイクルしやすい製品設計や、長い間使い続けることができるような材料を製造するためのコスト、再利用するための技術開発が必要になります。また、建物には安全性や快適性も求められます。自然だけを考慮してしまうと、コストや安全性、快適性にデメリットが生じてしまいます。だからこそ、人と地球がともに進むことは難しいことなのです。

私の描く「人と地球が共に進む建築産業」を実現させるためには、自然環境と建築産業が互いに悪影響を最低限にして、限りある資源を循環させ、有効に利用していくことが、共存していく未来につながると思います。そして、「人」と「自然」が、何十年先の未来でも互いに支えていける地球につなげることが今を生きる建設産業の役目であると私は考えます。

優秀賞

命を守る仕事

佐潟（さがた） 八重（やえ）［鹿児島県立鶴翔高等学校 総合学科環境緑地系列 2年］

建設業は「地図に残る仕事」だと聞くことがありますが、私は「命を守る仕事」だと思います。

高校1年生の夏、私は進路について悩んでいました。私の通う高校は、2年生になると大学進学を目指す進学コースや簿記やパソコンの操作を学ぶ情報系のコースなど、自分の学びたい専門分野を選べる学校で、1年生の冬にはどのコースに進むのか最終決定をしなければいけませんでした。いくつかある系列の中で私が興味を持ったのが環境緑地系列でした。その名前の通り、身の回りの環境や農業土木、造園などについて勉強するコースです。このような分野の仕事に興味を持ったものの、力仕事で体力的にきつく、大きな重機を扱う危ない仕事の分野だというイメージがあったので、本当にこの仕事を将来できるのだろうかと不安でした。そんな時に地域の企業の方々の話を聞く機会がありました。今まで建設業は力仕事に向いている男性の仕事だと思っていましたが、女性だからこそできる繊細な仕事でもあると聞き、進路を決定しました。

私が建設や土木、環境について学び始めてから数か月しか経っていませんが、今まで気に留めていなかった身近な建設物や、建設業の方々が外で作業しているところを見るようになって考えたことがあります。それは、建設業は「命を守る仕事」だということです。人が生きるために必要な衣食住のうちの「住」は建設業が支えており、家や学校だけでなく橋や道路なども建設業に携わる人々によって造られています。人が生きていくためにこの仕事が必要なのはもちろんですが、地震や台風などの災害が多い日本では、より建設産業が重要だと思います。しかし、建設産業の大切さを十分に理解している人はまだまだ少ないのではないでしょうか。生活と建設業の関わりが深いことや、人の命を守る仕事は医療だけではないことを知ってもらうことで、建設業の重要さが伝わると思います。

これからの建設産業は私たちのような若い人材が担っていくことになります。技術者の高齢化や人材不足について耳にすることがありますが、その課題を解決するには世の中の人々の建設業に対してのイメージを良い方向に変えなければいけません。以前の私のように、きつい、危ない、力仕事で女性の働き手が少ないというイメージを持っている人が多いと思いますが、実際にはコンピューターや最新機械の導入、働き方改革によって誰でも働きやすい環境が作られており、女性の積極的な雇用を進めている企業もあります。このような改善されてきている良い点や魅力をアピールしていくことで、人材不足の解消ができ建設業に興味を持つ人も増えると思います。建設業は「命を守る仕事」であることを広め、未来の建設産業を盛り上げていきたいです。

優秀賞

夢はオペレーター

宮原（みやばら） 史凪（ふみな）［鹿児島県立鶴翔高等学校 総合学科環境緑地系列 2年］

「かっこいい仕事」建設産業について最初に思った言葉です。私はよくSNSで建設関係について調べて見ています。建設機械の作業の動画には、レバーを自在に操り、淀みなく流れるように作業する職人の姿がありました。映像を見て、当時中学生の私はこんな風になりたいと思ったことを覚えています。今思えばあの瞬間におぼろげながら自分の進む道が見えたのかも知れません。建設機械には様々な物があり、一度は乗って操作してみたいと思っています。高校に入学して2年生から環境緑地系列に進み、そこで建設産業のことを学びました。建設会社や測量設計の会社の話を聞く機会もありました。建設産業がどれだけ私たちの生活に深く関わっているか、社会にとってどれほど重要かを知ることができました。

建設産業は建物だけを建てているのではなく、道路や橋、トンネルなど私達が生活していくうえで欠かせないライフラインに関わる産業です。そして、災害復旧や維持メンテナンスも大切な建設産業の役割です。そのうえ外での仕事となるので、季節に関係なく暑かろうが寒かろうが仕事をしないといけません。体力的に過酷な仕事です。その上、建設産業のことを「勉強ができない奴がやる仕事」と、世間的に良くないイメージを持っている人もいます。しかし、私はそう思いません。なぜなら暑い日も寒い日も汗を流しながらみんなが困らないために体を動かし、日本をもっと良くしようとしている姿は誇らしいです。私はそんな姿に憧れ、建設産業の職に就きたいと思うようになりました。このことを親に相談しました。正直否定されると思いました。しかし、返ってきた言葉は「あなたの就きたい仕事をやりなさい」でした。私は、驚きました。そして同時に応援してくれる人のために必ず夢を叶えようと誓いました。

私は、夢に一歩近づきました。これから建設産業についてもっと深く学び、いずれみんなに頼られる機械オペレーターになります。日本では建設産業に従事する人も高齢化が進んでいると聞きます。だから私たちのような若い人への期待を強く感じています。私にできることは建設産業のイメージを、次の若い世代が憧れる、なりたい職業NO.1にできるように技術を磨いていくことです。私の手がけた工事で社会基盤が整備され、豊かな生活が維持できるようにしたいです。しかし今の私は、建設産業について知らない事ばかりです。これからの学習で一つひとつを理解し、私の将来の目標「質の良いライフラインの提供」「建設産業のイメージアップ」を実現させたいです。

建設業しんこうWeb

建設産業の今を伝え未来を考える

https://www.shinko-web.jp/

建設産業人材確保・育成推進協議会　事務局／ 一般財団法人 建設業振興基金

〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-2-12 虎ノ門4丁目MTビル2号館6階　TEL 03-5473-4572　FAX 03-5473-4594
E-mail jinzai@kensetsu-kikin.or.jp　URL https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/

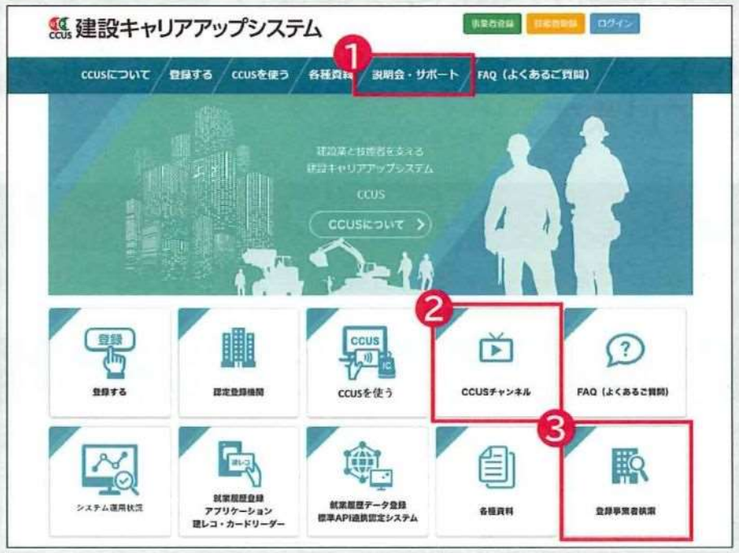
※ 本冊子掲載記事の無断転載を禁じます。

建設業しんこう別冊　令和4年度　作文コンクール 入賞作品集

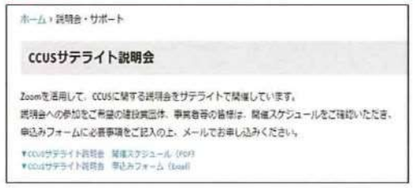
編集・発行　建設業振興基金

CCUSについてもっと知りたい！

建設キャリアアップシステム | で検索！ https://www.ccus.jp/



① CCUSに関する無料説明会をサテライトで開催しています。



ホームページトップヘッドラインの
「説明会・サポート」➤「CCUSサテライト説明会」から、

▼CCUSサテライト説明会　開催スケジュール（PDF）
▼CCUSサテライト説明会　申込みフォーム（Excel）

をダウンロードしてお申込みください。

② YouTubeでCCUSに関する説明動画を公開しています。

③ 地元業者の登録状況を検索できます。

一般財団法人 建設業振興基金
建設キャリアアップシステム事業本部（03-5473-4586）
〒105-0001東京都港区虎ノ門4-2-12虎ノ門MTビル2号館

建設キャリアアップシステム CCUS Construction Career Up System をご存じですか？

建設キャリアアップシステム ― CCUS ― とは、
建設業界共通の基盤として、建設企業、建設現場と就業履歴情報を網羅的に登録する仕組みです。

このシステムを活用して
若い世代が**安心して将来を託せる**
技能や経験に応じて**給与を引き上げる**
技能者を**雇用し育成する企業が伸びる**
建設業を目指しています。

システムへの登録

資格や社会保険加入状況などを登録すると、CCUSカードが交付されます。

就業履歴の蓄積

現場に設置されたカードリーダーなどでCCUSカードを読み取ります。

技能者の技能・経験を評価

レベルに応じた色のCCUSカードを技能者に交付。手当や給与に反映する環境整備

専門工事業の施工能力のPR

所属する技能者のレベル・人数等に応じて施工業者の施工能力を評価・公表。

このシステムは、**建設産業が将来にわたり持続可能であり続けるための取組として、国土交通省と建設業界団体等が連携**し、官民一体となって推進しています。

CCUSは 一般財団法人 建設業振興基金 が運営しています。

CCUSの登録・利用が進んでいます！

すでに**技能者の約3割**(約107万人)が登録済。
施工実績のある**事業者の約4割**(約14万社)が登録済。
現場利用も増加中！(延べ7000万件の利用あり※)

※ 就業履歴登録

技能者のメリットは？

★健全な技能者であることの証明★

- ✔ どこの現場・どんな事業主にも、**技能や経験等を客観的に証明**
- ✔ 技能や経験が**客観的に評価**され、**技能や経験に応じた処遇を期待**
- ✔ **建退共電子申請との連携により、適切な退職金支払いに寄与**
- ✔ 健康被害・事故・賃金不払等の際の**身を守るための就業証明**

事業者のメリットは？

★人を育てる健全な事業者であることの証明★

- ✔ 技能者を育てると、施工能力の評価がUPし、**受注機会の拡大**に期待
- ✔ 技能者の社会保険加入状況の確認など**事務作業の効率UP**
- ✔ 事業者登録及び現場利用により、**公共工事で評価がUP**
- ✔ ハローワークで求職者への応募勧奨を受けるなど、**求人活動での支援がある**

CCUS の利用手順

STEP ① 事前登録

事業者登録・技能者登録

STEP ② 現場運用

現場登録

施工体制登録
施工体制技能者登録
（職種・立場等）

STEP ③ 就業履歴の蓄積

カードリーダー等設置

現場でカードをタッチ

→就業履歴を蓄積！

公共工事での活用を促進しています！

技能者の処遇を改善して担い手を確保し、建設業を将来にわたり持続可能にするため、**国土交通省は、公共工事発注者による CCUS の活用を促進**しています。

国直轄工事

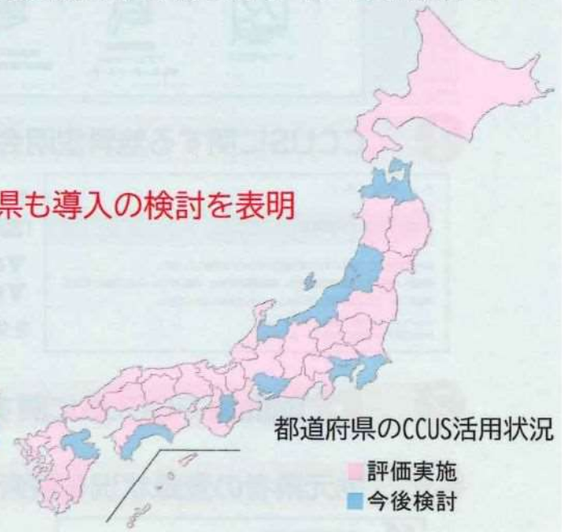
CCUS活用モデル工事を実施し、事業者登録率・技能者登録率・就業履歴蓄積率を確認の上、達成状況により工事成績評定で加点

地方公共団体発注工事

都道府県においては、**CCUS** の登録や就業履歴の蓄積を行っている事業者を
①モデル工事等の工事評定で加点
②入札時の総合評価方式で加点
③入札参加資格での加点　により評価

→ 36道府県が、公共工事発注時の活用業者の評価を導入し、他の全ての都県も導入の検討を表明
(2022年9月末現在)

市区町村においては、**さいたま市・横浜市・名古屋市・岡山市**などがモデル工事における**工事成績評点での加点**、**仙台市・さいたま市・浜松市・堺市・広島市・茅ヶ崎市・熊本市・世田谷区**などが**総合評価方式での加点**、**千葉市・相模原市・郡山市**などが**入札参加資格での加点**を導入済



経営事項審査

経営事項審査においては、**CCUS** の登録状況(技術職員数・知識及び技術又は技能の向上に関する取組の状況)及び利用状況(現場登録及びカードリーダー設置等の措置)に応じた加点措置を導入

その他、
○ 建退共制度の電子申請方式においては、CCUSと連携して、登録された就業履歴データを掛金充当に活用し、電子申請に係る事務の効率化、適切な退職金給付につなげます。
○ 公共工事の発注者向けに、元請事業者との契約に基づき、工事に係る①安全書類、②週休2日達成状況、③CCUS登録状況を提供するサービスを開始しました。
(2022年12月～)

女性の就業継続のための

建設キャリアアップシステム

CCUS における就業履歴の蓄積は、男性のみならず女性の就業継続にもご活用できます。女性の復職時における CCUS 活用のメリットや、女性の様々なライフイベントにおける復職のモデルケースをご紹介します。

～建設キャリアアップシステムとは?～

「建設キャリアアップシステム（CCUS）」は、技能者が、技能・経験に応じて適切に処遇される建設業を目指して、技能者の資格や現場での就業履歴等を登録・蓄積し、能力評価につなげる仕組みです。技能者の技能レベルに応じた4段階のカードを発行しています。

レベル１（ホワイト）　レベル２（ブルー）　レベル３（シルバー）　レベル４（ゴールド）

詳しくはこちら

女性の復職時における CCUS 活用のメリット

～技能者としてのメリット～

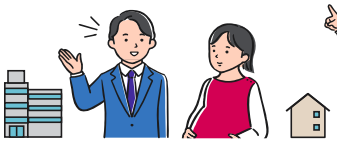
休業してもキャリアがリセットされることなく、復職時に休業前のキャリアからリスタートすることができ、適切な処遇や更なるキャリアアップを目指すことが可能です。

～事業者としてのメリット～

女性技能者の復職時に、CCUS で過去の就業履歴等をすぐに確認できますので、技能経験に応じた採用を検討することが可能です。

ケース１　産休・育休からの復職

A さん（30 代前半）
左官技能者
工業高校を卒業後、地元の左官会社に入社。



- CCUS に技能者登録をしてキャリアスタート！先輩職人に同行して仕事の基本を学びます。
- 一人目の出産による産休・育休を取得。
- CCUS の活用によりレベル２からリスタート！
- 二人目の出産による産休・育休を取得。
- CCUS の活用により再度レベル２からリスタートし、レベル３にキャリアアップ！
- レベル４に向けて引き続き CCUS に就業履歴を蓄積していく。

[年齢] 18 → 21 → 22 → 23 → 26 → 27 → 33

レベル１（入社～） → レベル２ → 産休・育休① → レベル２（職場復帰） → 産休・育休② → レベル２（職場復帰） → レベル３

ケース２　介護からの現場復帰

B さん（40 代後半）
鉄筋技能者
専門学校を卒業後、地元の鉄筋会社に入社。

- CCUS に技能者登録をしてキャリアスタート！先輩職人に同行して仕事の基本を学びます。
- レベル３になり、職長として後輩を指導できる立場になる。
- 親の介護により事務所勤務に配置換え。
- CCUS の活用によりレベル３からリスタート！最終的にレベル４のゴールドカードを取得し、現場の責任者として活躍する。

[年齢] 20 → 23 → 27 → 33 → 40 → 45

レベル１（入社～） → レベル２ → レベル３ → 介護による事務所勤務 → レベル３（現場復帰） → レベル４

国土交通省
一般財団法人建設業振興基金

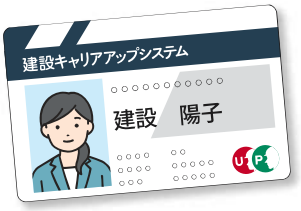
建設キャリアアップシステムの仕組み

積極的に能力評価（レベル判定）を申請しましょう！

詳しくはこちら

システムへの登録

登録すると、CCUS カードが交付されます。

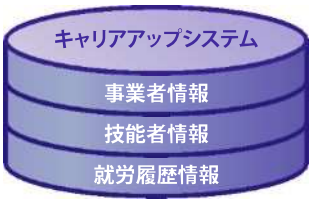


現場での読み取り

現場に設置されたカードリーダーなどで CCUS カードを読み取ります。

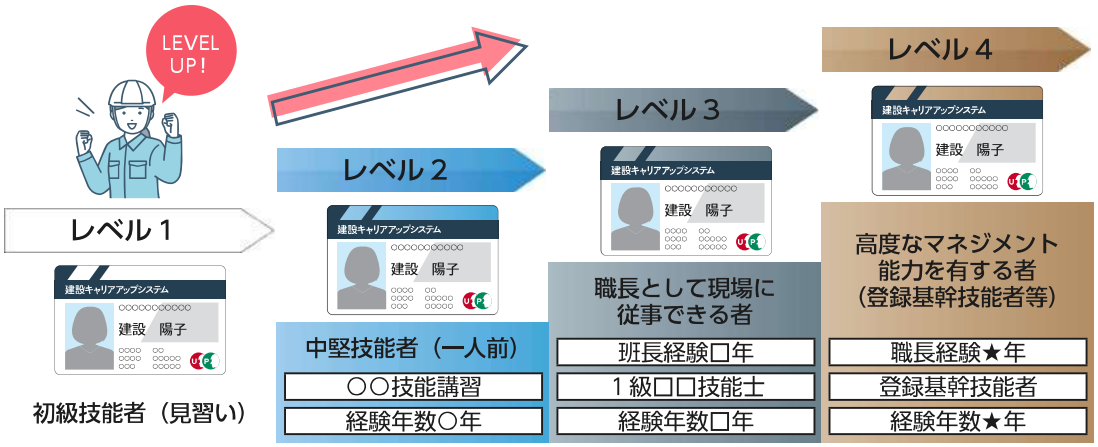
就業履歴の登録

CCUS に就業履歴が登録されます。



CCUS に登録された情報をもとにレベルを評価

CCUS に登録された就業履歴と資格によりカードの色がレベルアップします。



point

- 技能と経験により**カードの色がレベルアップ**
- **技能経験に応じた処遇の改善**に向けた取組が進められています。

「女性の定着促進に向けた建設産業行動計画」について

□行動計画の概要

平成 26 年に「もっと女性が活躍できる建設業行動計画」を策定して約５年、新・担い手３法、i-Construction、建設キャリアアップシステムなど建設産業を取り巻く環境の変化により、女性が就業しやすい環境が整いつつありました。そのような中、環境の変化に対応するため､次の５年間を見据えた**「女性の定着促進に向けた建設産業行動計画」を令和２年１月16日に官民共同で策定**しました｡新計画では、建設産業で働く全ての女性が「働きがい」と「働きやすさ」の両立により、就業継続を実現することを目的にして、「働きつづけられるための環境整備」を中心に、３つの柱で構成し、それぞれの柱の趣旨を達成するための目標を設定しました。

策定団体	国土交通省および建設業５団体※1、建設産業女性活躍推進ネットワーク※2⊠ ※１　建設業５団体：（一社）日本建設業連合会、（一社）全国建設業協会、（一社）全国中小建設業協会、（一社）建設産業専門団体連合会、（一社）全国建設産業団体連合会 ※２　現在の建設産業女性定着支援ネットワーク
内容	・「働きつづけられるための環境整備」を中心に３つの柱で構成 ①働きつづけられるための環境整備を進める ②女性に選ばれる建設産業を目指す ③建設産業で働く女性を応援する取組を全国に根付かせる
数値目標	柱の趣旨を達成するための取組目標（～令和６年度） ・「女性の入職者数に対する離職者数の割合」を前年度比で減少させる ・「入職者に占める女性の割合」を前年度比で増加させる ・新計画の内容の認知度 100% を目指す ・都道府県単位で活動している団体の「建設産業女性定着支援ネットワーク」への加入をすべての都道府県で目指す 詳しくはこちら

建設産業女性定着支援ネットワークへの加入について

建設産業女性定着支援ネットワーク（以下、当ネットワーク）は、建設産業で働く女性の入職促進、定着を図ることを目的に2018 年度に設立され、全国各地に組織されている、女性の定着を推進する活動を行っている団体によるネットワークを構築しています。当ネットワークでは、この取組を全国に根付かせるために、新規団体を募集しています。建設産業で働く女性の入職、定着を推進することを主たる目的とした団体であれば、幅広く加入頂けますので、ぜひ加入をご検討ください！

詳しくはこちら

【問い合わせ先】建設産業女性定着支援ネットワーク
（事務局：（一財）建設業振興基金）TEL 03-5473-4572　MAIL jyokatsu@kensetsu-kikin.or.jp

高校生・専門学校の皆さまへ

一般財団法人 建設業振興基金

建設業経理士
建設業経理事務士

建設業の経営に役立つ資格です

建設企業で注目されている資格です！

建設会社は、品質の優れた建物や道路などを造ることが最も大切な仕事ですが、工事ごとにコスト管理をしっかりと行い、一定の利益を上げなければ会社が存続していく事はできません。建設業に特化した会計知識は建設業経営に不可欠なものであり、このための資格が「建設業経理士」です。

建設業経理事務士

- **4級** 初心者向け
- **3級** 初級者向け

建設業経理士

- **2級** 中級者向け
- **1級** 上級者向け

●高校生が「建設業経理事務士」を取得すると**ジュニアマイスター顕彰制度**の得点（4級1点、3級4点）が得られます。

ジュニアマイスター顕彰制度とは

工業高校の生徒の意欲や技術・技能向上を目的とし、資格取得や競技大会の成果等に点数をつけ、その合計点で「(公社) 全国工業高等学校校長協会」が表彰する制度です。

●「建設業経理士」が所属している企業は、公共工事を受注しようとする場合に必要な**経営事項審査**において加点されます。

経営事項審査とは

公共工事を発注者から直接請け負おうとする建設企業が必須で受ける審査です。この審査によって、「経営状況」「経営規模」「技術力」「その他の審査項目」について数値化し、各公共発注機関が評価しています。

建設業の仕事の流れが学べます！

建設業は、他の製造業とは異なり、注文を受けた後にモノを造ります。（これを「請負」といいます。）請負は、モノが出来る前に販売価格が決まっています。そのため、工事に発生するお金やモノ（材料等）の動きを管理しながら会社としての利益を同時に生み出すようにしていく必要があり、その特徴を理解して実践するために、この資格が設けられています。

合格者数（令和3年1月31日現在）

4級	3級	2級	1級	計
試験：45,013人（合格率78.9%）	試験：189,820人（合格率64.3%）	321,533人	27,510人	840,696人
特研：166,103人（合格率97.5%）	特研：90,717人（合格率92.4%）			

※合格者数は累積、合格率は直近1年間になります。

資格を取得するには2つの方法があります

方法1 自分で学習する

全国の都道府県で開催する「検定試験」に合格する！
（検定試験は、1級・2級は年2回、3級・4級は年1回の実施）

方法2 特別研修に参加する ※特別研修は3級・4級のみ実施

学校単位で開催する「特別研修」に皆で参加し集中学習、最終日に行う「検定試験」に合格する！

詳しくは裏面参照

高校限定　学校単位の申込による

検定試験と特別研修のご案内

「特別価格」で受験・受講ができます！

検定試験

学校単位の申込は**受験料が半額に！**（学校単位での申込みであれば１名から受付けます）

試験日	【令和４年度】	令和４年９月11日（日）		（１級・２級）
		令和５年３月12日（日）		（１級・２級・３級・４級）
受験料	１級１科目	通常 7,800円	➡	3,900円
	１級２科目	通常 11,100円	➡	5,550円
	１級３科目	通常 14,400円	➡	7,200円
	２級	通常 6,800円	➡	3,400円
	２級・３級	通常 12,300円	➡	6,150円
	３級	通常 5,500円	➡	2,750円
	３級・４級	通常 9,900円	➡	4,950円
	４級	通常 4,400円	➡	2,200円
受験地	全国47都道府県主要都市			

特別研修（講習と検定試験をセットで実施）

４級と３級の特別研修は学校に講師が講義にまいります！集中学習で**合格率もUP！**

研修日数	４級：連続した２日間　３級：連続した３日間 （時間帯 9:00～12:00、13:00～16:30） ※ 研修時間は開始時間の前後等対応可能です。
受講料	【４級】 **８,０００円**（通常23,100円） 【３級】 **１２,０００円**（通常34,650円） 高校生を対象として就職に役立つ資格取得を支援するための特別価格です
研修会場	各学校の教室等　催行可能な人数については、お問合せください。

【お問合せ先】　一般財団法人建設業振興基金　経理研究・試験担当
TEL　03-5473-4581（土日・祝除く 9:00～12:00、13:00～17:30）
E-mail　gy2@kensetsu-kikin.or.jp

建設業経理検定 WEB　https://www.keiri-kentei.jp/　建設業経理検定　検索

2022.4

人材協定期便はメールでの受け取りが可能です！

年３回お届け予定
（各学期）

人材協定期便

情報共有が容易に！

人材協定期便のメール受け取りをご希望される方は、下記項目をメールにてご送信下さい。

- ✓ 学校名
- ✓ メールアドレス
  ※組織の代表アドレスをご記載下さい※
  （例：”進路指導室”＜・・・@.co.jp＞）
- ✓ 担当者名
- ✓ 電話番号

送信先メールアドレス

jinzai@kensetsu-kikin.or.jp